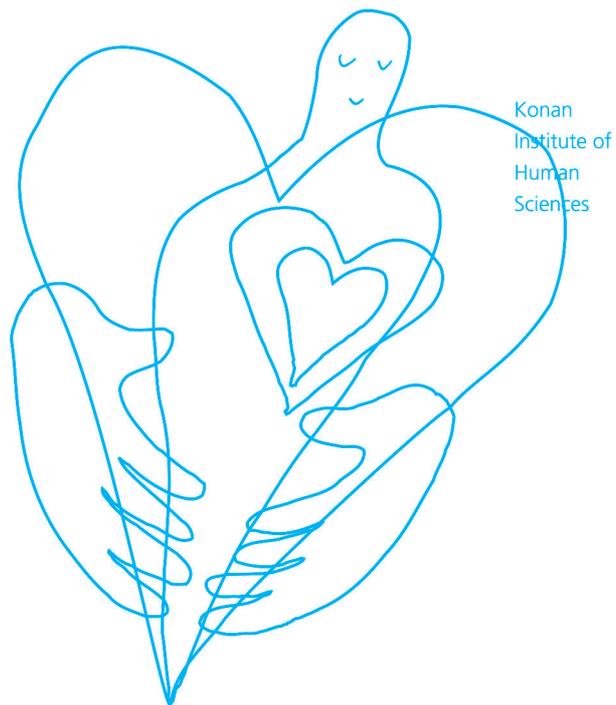




文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

「〔第2回〕子育て環境と子どもに対する意識調査－父親版－」

報 告 書



2011年2月

甲南大学人間科学研究所
第3期子育て研究会

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「〔第2回〕子育て環境と子どもに対する意識調査—父親版—」報告書

目 次

はじめに	1
調査の概要	2
第1章 基礎統計	
1 子どもと出産時の状況	3
2 保護者と家族の状況	4
第2章 子どもの誕生をめぐって	7
第3章 子育ての状況—第1回調査（2002年）との比較を通して— ..	10
第4章 子育てをめぐる意識について	
1 子育てをする父親の気持ち	15
2 仕事・家庭の状況と子育て意識の関連	16
3 自由記述の内容分析	18
第5章 父親の役割と実感をめぐって	
1 父親の役割をめぐる父親の意識	23
2 「父親になったと感じた時期」に関して	28
第6章 父親の子育て参加度と諸要因との関連	
1 家庭状況との関連	32
2 妊娠・出産状況との関連	34
3 子育てをめぐる意識との関連	34
第7章 父親の家族に対する意識—文章完成法の分析—	
1 はじめに	37
2 形式的分析	37
3 内容分析	37
4 まとめ	42
第8章 父親が考える父親への育児支援	43
おわりに	45
資料（調査質問紙）	46
第3期子育て研究会メンバー一覧	52

はじめに

1990年の1.57ショック以降、わが国は少子化の傾向に歯止めをかけるため、さまざまな施策を展開してきています。子育てを個人や家族の私的な行為として捉えるのではなく、社会全体で支えていこうとする方向に進んでいるのです。その一方で、閉塞的な子育て環境に置かれ、わが子の虐待に及んで公的な介入の対象となる親はまだ増加の一途をたどっています。現代人の「次世代を育てる」という営みには、経済的、制度的な支援では十分手の届かない困難が、根強く影を落としていると言えるでしょう。

甲南大学では、1998年より文部科学省の学術フロンティア推進事業の助成を受け、臨床心理学のスタッフを中心に「子育て研究会」を組織し、阪神間およびその周辺に在住の乳幼児を育てている母親、父親、祖母を対象とする「子育て環境と子どもに対する意識調査」を2000年、2001年、2002年にそれぞれ実施してきました。2006年には〔第2回〕母親調査を実施し、同じ地域での経年変化を探る試みも行っています。

2008年度からは文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成事業の助成を受け、人間科学研究所として「心の危機の見極めと実践的ネットワークの創造」をテーマに、4つの共同研究プロジェクトが実施されています。子育て研究会は「プロジェクト2：育てる関係の危機と子育て意識の多相性についての研究」を推進する母体となってこれまでの調査研究を継承し、今日の子どもと家族が置かれている状況や、子育てをめぐる意識のありようを明らかにし、子育てに対してどのような支援が必要かを臨床心理学的、および社会学的な視点から引き続き探っていく予定です。

本報告書は、2010年に実施した〔第2回〕父親調査から得られた基礎資料と分析結果をまとめたものです。2010年は、父親の育児休暇取得率の増加を意図した改正育児・介護休業法が実施され、厚生労働省による「イクメン・プロジェクト」が展開されるなど、父親の子育てがクローズアップされた年でした。本報告書から、今日の父親はどのような子育て意識を持ち、子育てを通してどのような経験を得ているか、第1回調査時（2002年）とは何が変化したか、そして父親への子育て支援に何が求められているのかを読み取っていただくと幸いです。

調査の実施にあたっては、神戸市東灘区保健福祉部子育て支援係、区内の保育所（園）、幼稚園に多大なご協力をいただきました。ここに深謝申し上げます。また、ご回答いただきました保護者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

2011年2月

甲南大学人間科学研究所「第3期子育て研究会」代表

甲南大学文学部教授 高石 恭子

調査の概要

1. 調査の目的

0～6歳（就学前）の乳幼児をもつ保護者（父親）が、子育てについて、また子どもを育てている自分や配偶者について、どのような意識をもっているかを捉え、第1回と同じ調査項目については経年比較を行う。

2. 調査対象

2010年5月現在、神戸市東灘区およびその周辺に在住する乳幼児の子どもをもつ保護者。（一部の質問項目は、父親のみを対象）

3. 調査方法

神戸市東灘区の全公立保育所、幼稚園、ならびに一部の私立保育園、甲南大学カウンセリングセンター心理臨床カウンセリングルーム主宰の子育て支援グループに在籍する子どもの保護者に各機関を通して直接配布。各家庭での自記式質問紙調査。回収は郵送による。

4. 調査期間

2010年5月～6月

5. 回収状況

2200票配布（内訳：公立保育所10機関1175、公立幼稚園5機関570、私立保育園4機関435、子育て支援グループ1機関20）回収数377（回収率17.1%）

このうち本報告書の分析では父親が回答した330を対象とした。

6. 調査項目

子どもの誕生をめぐる父親の意識／子育ての状況／子育てをめぐる意識／父親の役割とイメージ／父親となる実感／父親の家族についての意識／父親の育児支援について

第1章 基礎統計

1. 子どもと出産時の状況

本調査では、子どもが2人以上の場合、その中から未就学児である子ども1人を選択して回答を求めた。また、以下の結果は、「問6 お子様との続柄」にて「実父」と回答した330名を対象としたものである。今回の調査結果では、「継父」という回答は見られなかった。第1回父親調査（2002年）では継父は0.6%であった。（以下、[]内は、第1回父親調査の結果である。）

まず、回答の対象となった子どもについて、順に結果を示していく。

性別は、「男」が54.2%（179名）[50.8%]、「女」が45.8%（151名）[47.9%]であり、やや男児の方が多くなっている（図1-1）。

子どもの平均年齢は3.7歳 [4.0歳] であった。年齢の分布をみると、「0歳」が3.0%（10名）、「1歳」が9.7%（32名）、「2歳」が9.4%（31名）、「3歳」が10.3%（34名）、「4歳」が27.6%（91名）、「5歳」が35.2%（116名）、「6歳」が4.2%（14名）であった。「5歳」と「4歳」が多く、合わせると全体の約6割を占めている（図1-2）。なお、ここでの欠損値には、無回答および誤回答を含む（以下同様）。

子どもの数は、「2人」が46.7%（154名）[47.3%]と全体の約5割弱と最も多く、次いで「1人」（いわゆる一人っ子）が31.8%（105名）[33.4%]、「3人」が14.5%（48名）[15.8%]、「4人」が2.4%（8名）[2.7%]、「5人」が0.9%（3名）[0.2%]、「7人」が0.3%（1名）[なし]であった。平均すると1.6人の子どもを育てている。また、2人きょうだいまでの家族が全体の78.2%を、「3人きょうだい」までの家族が92.7%を占めた（図1-3）。

また、回答された子どもの出生順位を第一子かどうかで分けると、「第一子」が53.9%（178名）、「それ以外」が42.4%（140名）となった。そのため本調査は、約半数が父親の第一子の子育てに関する回答であると言えよう（図1-4）。

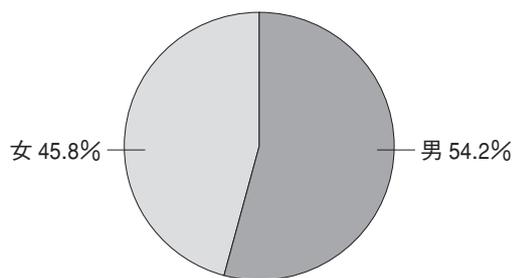


図1-1 子どもの性別

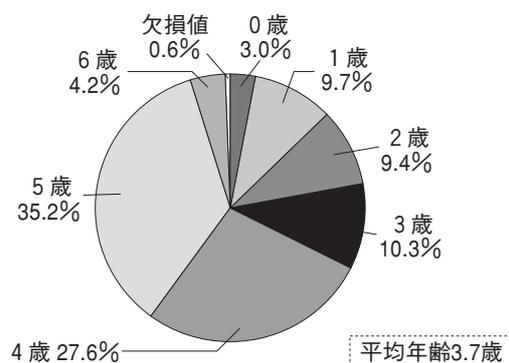


図1-2 子どもの年齢

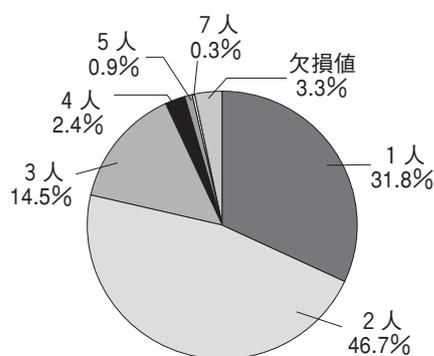


図1-3 子どもの数

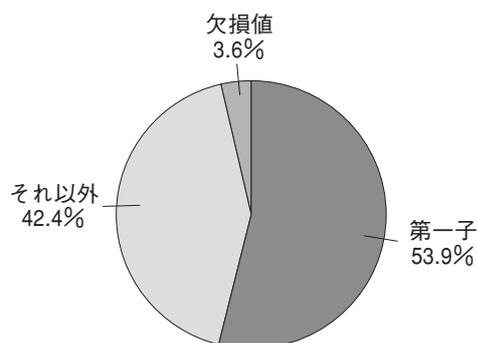


図1-4 子どもの出生順位（第一子か否か）

さらに詳細に子どもの数と出生順位との関係を見ていくと、「1人中1人目」（一人っ子）について回答したものが31.8%（105名）、「2人きょうだい中2人目」についてのものが27.0%（89名）、「2人きょうだい中1人目」についてのものが19.4%（64名）と、順に多くなっている（図1-5）。

最後に、子どもが日中、主に過ごしている場所は、「保育所（園）」が59.1%（195名）、「幼稚園」が38.2%（126名）であった。本調査票の配布先の多くが保育所（園）となっているため、これらが多くなっているようである。「自宅」は1.8%（6名）と少なく、「その他」が0.3%（1名）であった。概ね、就園児に関する回答が得られていることになる（図1-6）。

2. 保護者と家族の状況

次に、回答した「父親」、およびその家族のことについて示す。

回答者である「父親」の平均年齢は37.5歳（21歳～59歳）[36.2歳]であった。「30代」が62.4%（206名）と最も多く、次いで「40代」が30.9%（102名）であり、両者を合わせると、全体の9割以上を占めた。その他、「20代」が4.5%（15名）、「50代」が1.8%（6名）と、相対的に少なくなっている（図1-7、8）。

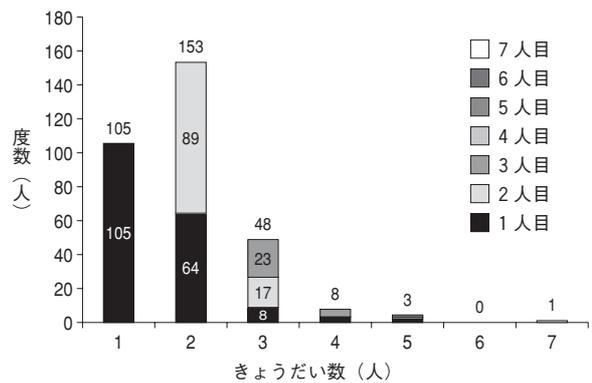


図1-5 子どもの数と出生順位の関係

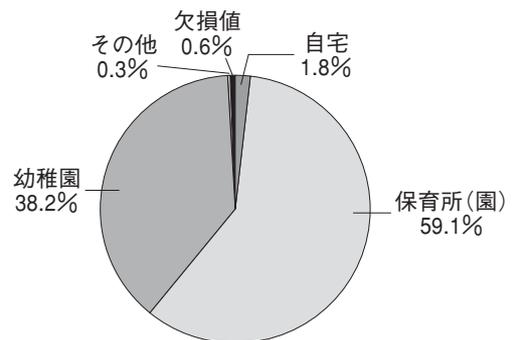


図1-6 子どもが日中過ごす場所

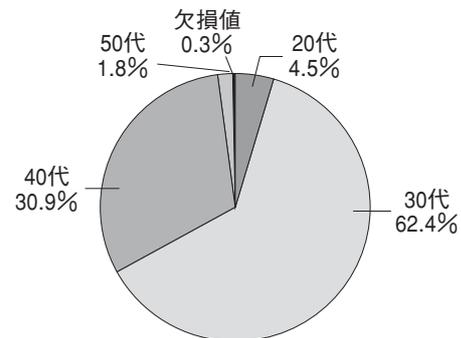


図1-7 父親の年齢層

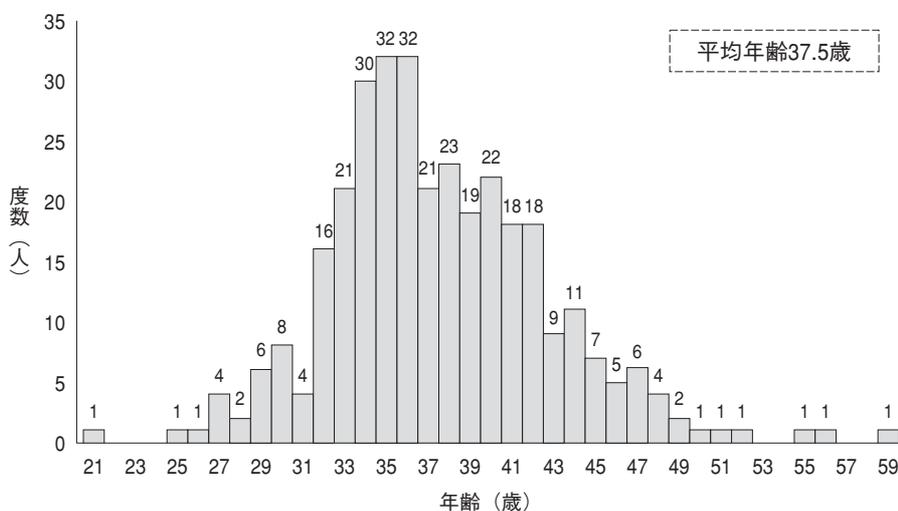


図1-8 父親の年齢と人数

家族構成は「核家族」が89.7%（296名）[85.5%]と大半を占めている。それ以外では、祖父母（両方／いずれか一方を含む）と同居する「大家族（祖父母のみ）」が最も多く、4.8%（16名）[5.2%]であった。また、父子のみで生活する「父子家族」は2.7%（9名）[0.4%]、父子家族に祖父母などの親族が同居する「父子家族+祖父母」が0.6%（2名）[0.4%]であった。第1回父親調査（2002年）と比べ、核家族と父子家族が増加している（図1-9）。

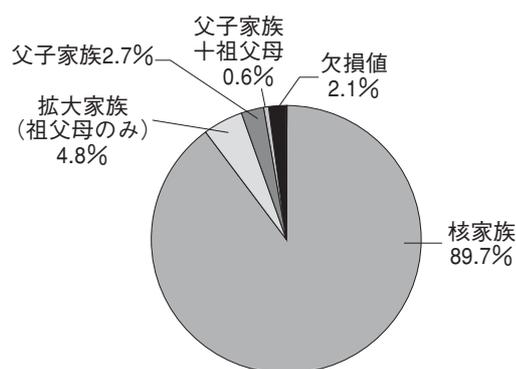


図1-9 家族構成

家族以外に子どもの面倒をみてもらうことのできる人（複数回答）は、「母方祖母」が58.8%（194名）、「父方祖母」が43.9%（145名）、「母方祖父」が34.8%（115名）、「父方祖父」が27.3%（90名）であった。やはり、最も身近な養育経験者である子どもの祖父母に頼むものが多いようであり、また比較的、父方よりも母方の祖父母に頼むものが多いようである。

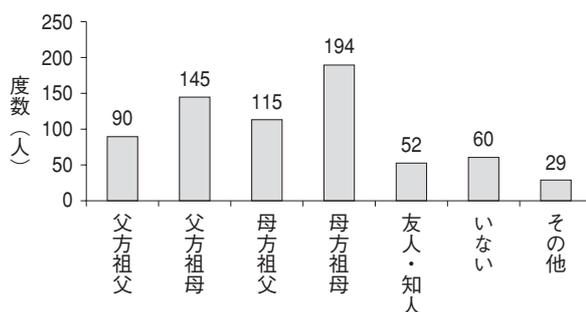


図1-10 家族以外に子どもの面倒をみてもらうことのできる人（複数回答）

親族以外では「友人・知人」が15.8%（52名）、「その他」が8.8%（29名）となっていたものの、誰にも子育てを頼ることができないという、「そのような人はいない」が18.2%（60名）と、約5.5人に一人見られた。「その他」のなかには、ファミリーサポートやおじ・おば等が挙げられている（図1-10）。

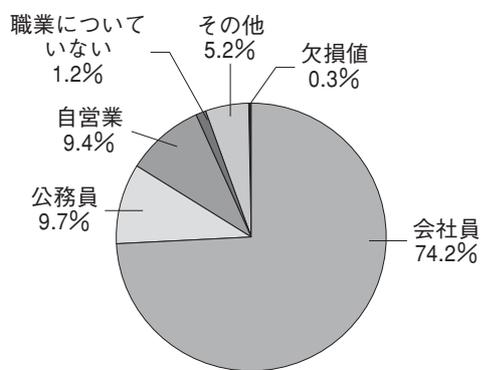


図1-11 父親の職業

父親の職業は、「会社員」が74.2%（245名）[70.7%]、「公務員」が9.7%（32名）[2.2%]、「自営業」が9.4%（31名）[10.2%]、「その他」が5.2%（17名）、「職業についていない」が1.2%（4名）であった。「その他」のなかには、アルバイト、パート、医療職、福祉職や教員等があった（図1-11）。

父親の休日は、「週2日」が71.5%（236名）、「週1日」が21.5%（71名）、「週1日未満」が3.9%（13名）、「週3日以上」が1.5%（5名）であった（図1-12）。

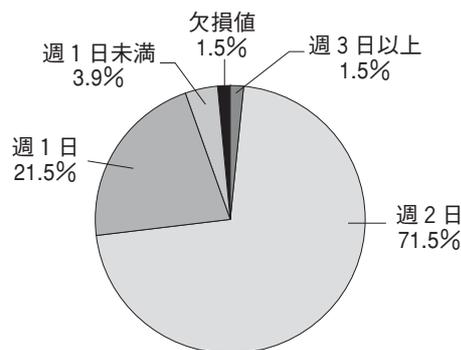


図1-12 父親の休日

また、父親の帰宅時間は、「18～20時」が39.4%（130名）、「20～22時」が34.5%（114名）、「22～0時」が13.3%（44名）、「16～18時」が3.6%（12名）、「その他」が7.3%（24名）であった。比較的早い時間に帰宅している父親が多い

ようである。「その他」のなかには、0時以降の帰宅や交代勤務のため、帰宅時間に変動があるという回答がみられた（図1-13）。

父親が育児休業制度を、「利用しなかった」ものは95.8%（316名）、「利用した」ものは3.0%（10名）であり、全体の9割以上が育児休業制度を利用しなかったことになる（図1-14）。

一方、「利用した」と答えたもの（10名）の休業期間は、5日間（2名）、1ヶ月（2名）、3ヶ月（3名）、5ヶ月（1名）、6ヶ月（1名）、1年（1名）であった。また、利用した父親は27歳～37歳であり、40代以降はみられなかった。

育児休業制度を「利用しなかった」と答えたもの（316名）のうち、「利用したかったが制度がなかった」ものが10.4%（33名）、「制度はあり、利用したかったが利用できなかった」ものが12.7%（40名）、「制度がなく、利用しようと思わなかった」ものが19.6%（62名）、「制度はあったが、利用しようと思わなかった」ものが36.4%（115名）、「制度についてよく知らない」ものが16.8%（53名）であった（図1-15）。

子どもの母親に関して、「職業についている」ものが60.0%（198名）[53.8%]、「職業についていない」もの（専業主婦）が39.7%（131名）[44.8%]であった（図1-16）。

「職業についている」と答えたもの（198名）は、平均して、週4.9日、一日7.1時間働いていることがわかった。

具体的には、週1日（2名）、週2日（2名）、週3日（10名）、週3.5日（2名）、週4日（11名）、週5日（148名）、週5.5日（2名）、週6日（19名）、週7日（1名）働いているという内訳であった。

また、一日の平均勤務時間は2時間（3名）、3時間（2名）、3.5時間（1名）、4時間（12名）、5時間（19名）、6時間（18名）、6.25時間（1名）、6.5時間（2名）、7時間（24名）、7.5時間（9名）、7.75時間（1名）、8時間（87名）、8.5時間（1名）、9時間（14名）、10時間（2名）、12時間（1名）という内訳であった。

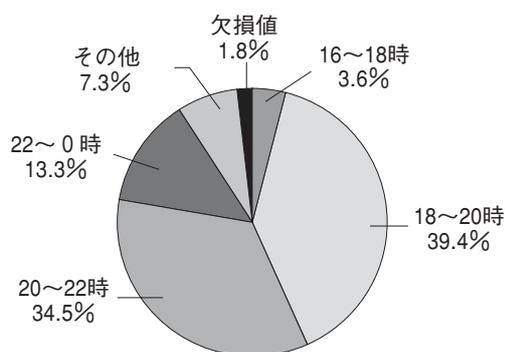


図1-13 父親の帰宅時間

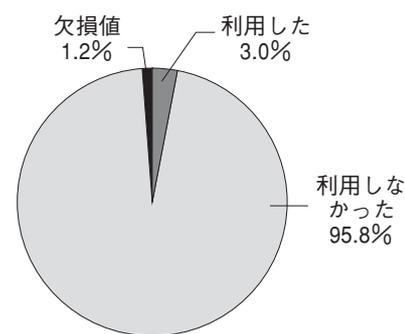


図1-14 育児休業制度の利用

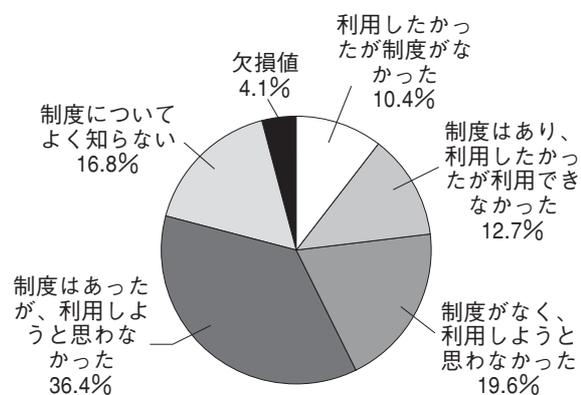


図1-15 育児休業制度を利用しなかった理由 (制度を利用しなかった316名中)

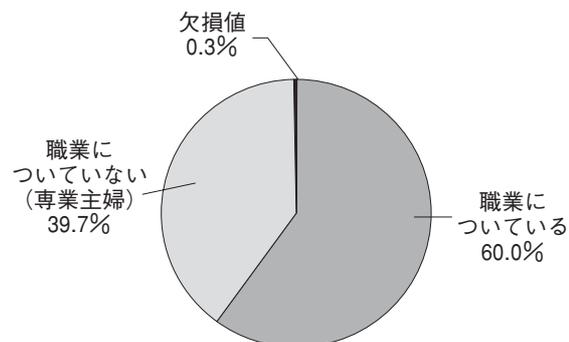


図1-16 子どもの母親の就業

第2章 子どもの誕生をめぐる

妊娠が判明した（子どもができたとわかった）時の父親の気持ちは、「たいへんうれしい」と「まあまあうれしい」を合わせて97.2%（321人）を占めている。「あまりうれしくない」が0.3%（1人）あるが、「ぜんぜんうれしくない」という回答はない（図2-1）。

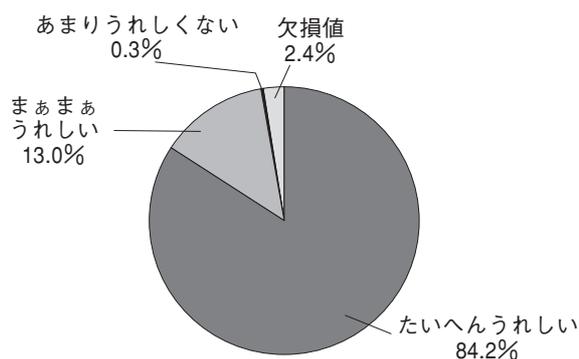


図2-1 子どもができたとわかった時の気持ち

妊婦健診への付き添い経験を問うと、74.6%（246人）が経験していた。診察室まで付き添って、胎児の映像を見たり心音を聞いたりしたことがあると答えた回答者だけでも、56.4%（186人）を占めている（図2-2）。

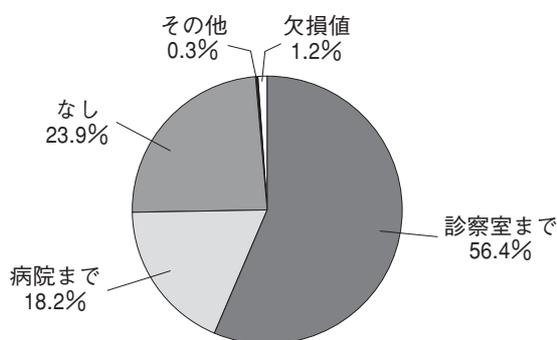


図2-2 妊婦健診に付き添ったかどうか

第1回父親調査（2002年）では付き添い経験があるのが62.5%、胎児の映像を見たりしたことがあるのは26.8%だったので、健診に付き添う父親の割合はこの8年で大きく増えたといえる。

父親学級や両親学級への参加も、第1回父親調査（2002年）では経験者が29.9%だったが、今回の調査では50.6%（167人）で、過半数の回答者が経験していた（図2-3）。

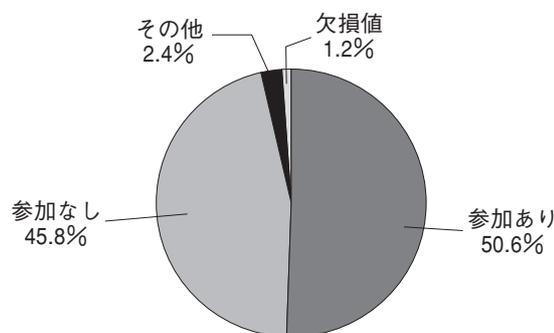


図2-3 父親学級に参加したかどうか

出産施設をみると、「産婦人科医院」が65.5%（216人）と最も多く、次いで「総合病院」が28.5%（94人）を占めている（図2-4）。

順序は変わらないものの、「産婦人科医院」で出産する割合は、第1回母親調査時（2000年）の54.9%から、第1回父親調査時（2002年）の56.4%、第2回母親調査時（2006年）の58.6%を経て増加を続けており、この10年で10ポイント以上増加している。

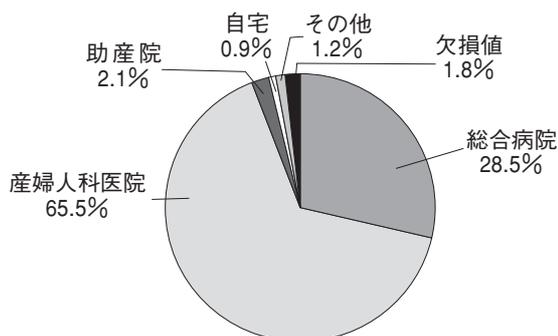


図2-4 出産施設

出産形態については、「普通分娩」が73.3% (242人)、「帝王切開」が17.3% (57人)、「吸引・鉗子分娩」が6.1% (20人)、「無痛分娩」が1% (1人)となっている(図2-5)。

第1回母親調査時(2000年)の結果(「帝王切開」が10.9%)や第1回父親調査時(2002年)の結果(「帝王切開」が14.3%)、第2回母親調査時(2006年)の結果(「帝王切開」が15.0%)と比較すると、「帝王切開」の割合が増加し続けている。「吸引・鉗子分娩」と「無痛分娩」の割合は第1回からほとんど変化していない。

出産への立ち会い経験については、「陣痛期から出産まで立ち会った」が51.2% (169人)で過半数を占める。「出産時のみ」の8.2% (27人)と「陣痛時のみ」の15.2% (50人)も合わせると、74.6%の父親が何らかの形で出産に立ち会ったことになる(図2-6)。

第1回父親調査時(2002年)では回答の選択肢がやや異なったものの、「分娩に立ち会った」が46.6%、「陣痛期を一緒に過ごした」が24.2%、「離れて待っていた」が28.0%であったので、なんらかの立ち会いをした割合には大きく変化はないが、陣痛期を共に過ごす父親の割合が増えてきているようである。一方で、出産への立ち会いの希望があったかどうかを尋ねる質問では、「希望していた」が57.0% (188人)、「希望していなかった」が36.7% (121人)となっている(図2-7)。父親自身はあまり立ち会いを希望していなかったが結果的に立ち会った場合もあると推察される。

はじめて子どもと対面した時の父親の気持ちは、「たいへんうれしい」と「まあまあうれしい」を合わせて95.5% (315人)を占めている。「あまりうれしくない」が0.6% (2人)あるが、「ぜんぜんうれしくない」という回答はなく、妊娠が判明した時とほぼ同じ傾向がみられた(図2-8)。

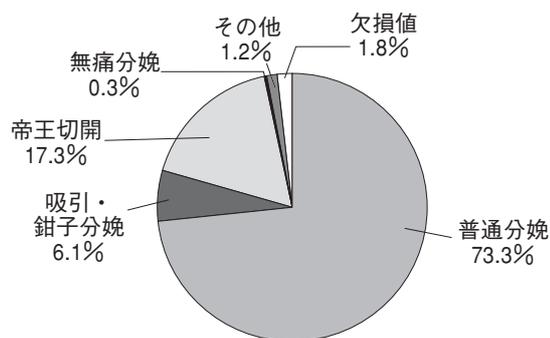


図2-5 出産形態

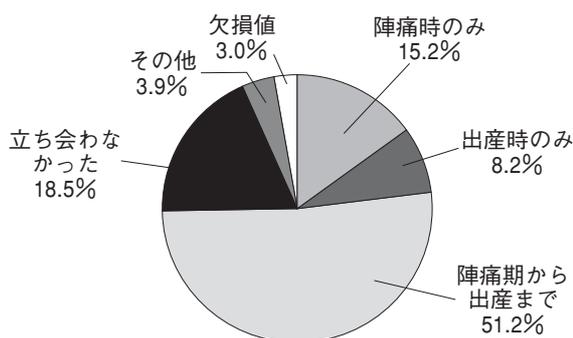


図2-6 出産時における父親立ち会い

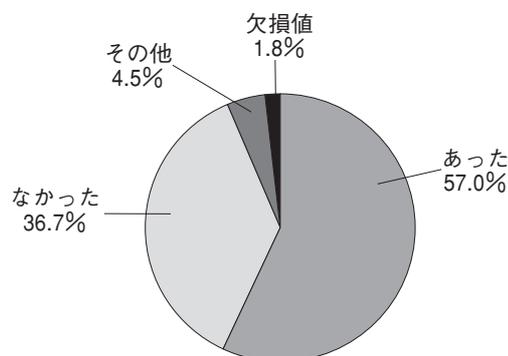


図2-7 出産立ち会い希望があったか

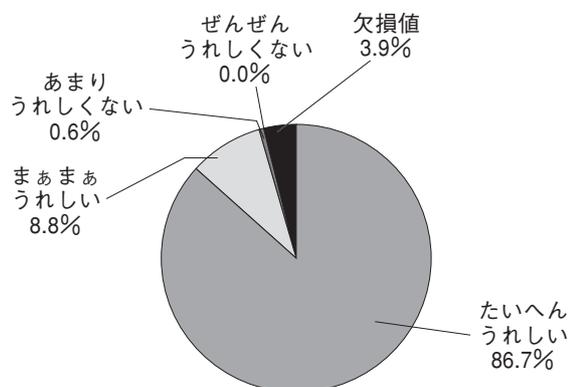


図2-8 はじめて子どもと対面した時の気持ち

さらに、はじめて子どもを抱いた時の気持ちは、「たいへんうれしい」と「まあまあうれしい」が合わせて95.5%（315人）を占め、「あまりうれしくない」と「ぜんぜんうれしくない」という回答が全くない。つまり回答者全てが「うれしい」という気持ちを回答している。（図2-9）

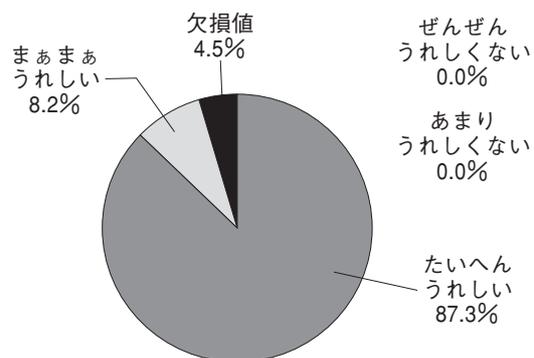


図2-9 はじめて子どもを抱いた時の気持ち

出産後、里帰りなどで子どもと離れている時期があったかについては、「離れている時期があった」が51.5%（169人）、「離れている時期はなかった」が46.6%（153人）とほぼ半々である。（図2-10）

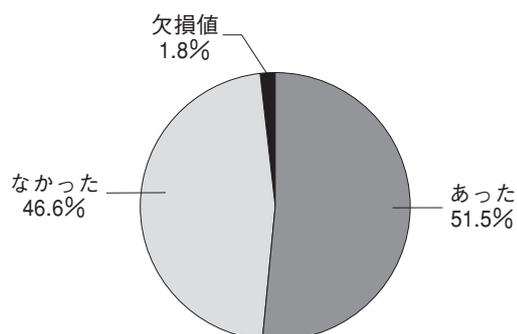


図2-10 出産後里帰りなどで離れている時期があったか

第1回父親調査時（2002年）は、「離れている時期があった」が55.2%、「離れた時期はなかった」が43.8%であったので、大きな変化はないようである。自由記述で離れていた期間を問うと、1週間から3年まで幅があったが、最頻値は1ヵ月であり、81名あった。里帰り出産をした場合、子どもの1ヵ月健診を待って自宅に戻るケースが多いからではないかと推察される。

第3章 子育ての状況 —第1回調査（2002年）との比較を通して—

父親の子育ての現状について調べるために、日常的にどの程度子育てに参加しているのかを問う項目を11項目（第1回父親調査（2002））から引き継いだ9項目に、新たに「子どものオムツを換える（子どもが赤ちゃんの時換えていた）」、「子どもを寝かしつける」の2項目を加えて作成し、各々の項目について参加の「頻度」と「それに関する気持ち」の二通りを尋ねた。頻度については、「ほとんど毎日」、「週に3、4日」、「週に1、2回」、「ほとんどない」、「その他（自由記述）」を選択肢とし、気持ちについては、「自分からすすんでしている」、「すすんでではないがしている」、「できていないがしたいと思っている」、「したいとは思わない」、「その他（自由記述）」とした。

まず、子どもの生活リズムに合わせる必要はあるものの比較的短時間で行える世話である「一緒に夕食をとる」、「一緒にお風呂に入る」、

「一緒に遊ぶ」について検討したところ、3項目とも同様の傾向を示した。頻度では、週に1、2回がいずれの項目でも最も多く、ほぼ50%を占めた（図3-1、2、3上段）。前回の第1回父親調査（2002）の結果と比較すると、ほとんどないという回答が半減し、その分、週1、2回と答えた父親の割合がやや増加したと考えられる。

一方、ほとんど毎日、週に3、4日と回答した父親の割合は合わせて約40%で、各項目とも横ばいであった。気持ちについては、自分からすすんでしているという回答の割合がいずれの項目でも50%を超え、したいとは思わないという回答はいずれも1%に満たない結果となった（図3-1、2、3下段）。前回の調査結果と比較すると、自分からすすんでしている父親の割合がいずれの項目でも約10ポイントずつ増加し、その分できていないがしたいと思っている父親の割合が約10ポイントずつ減少している。

- 頻度：ほとんど毎日／気持：自分からすすんでしている
- 頻度：週に3、4日／気持：すすんでではないがしている
- ▨ 頻度：週に1、2回／気持：できていないが、したいと思っている
- 頻度：ほとんどない／気持：したいと思わない
- 目 その他
- ⊠ 欠損値

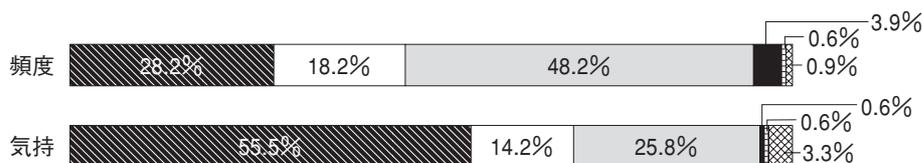


図3-1 子どもと一緒に夕食をとる

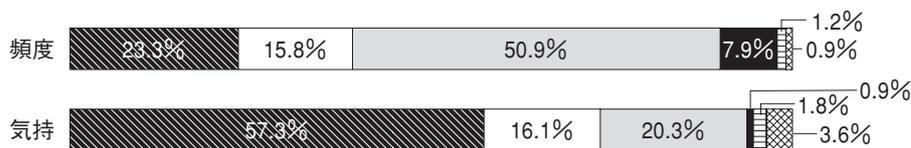


図3-2 子どもと一緒に風呂に入る



図3-3 子どもの遊び相手になって一緒に遊ぶ

このことから、多くの父親が2002年の調査以降も依然として週1、2回の休日にしか子どもとゆっくり接する時間を持っていないという状況にあるが、その姿勢においては、より積極的に子育てに参加しようという流れとなってきたことが窺える。

それでは、在宅中いつでも比較的短時間でもできる子どもとの関わりである「抱っこしたりスキンシップをする」はどうか。

頻度では、ほとんど毎日が81.8%、気持ちについても自分からすすんでしているとの回答が80.0%と非常に高い割合が示された(図3-4)。前回の調査結果と比較すると、頻度では、ほとんど毎日の割合が29.1ポイントと大幅に増加し、気持ちも自分からすすんでしているが6.1ポイント増加している。このことから、父親の子どもと触れ合おうという意欲は高い水準を保っており、それが実際に行動に移されるようになってきていると考えられる。

表3-1 どのような時にスキンシップをするか
(複数回答あり)

子どもが求める時	40	出かけた時	10
就寝時	35	出勤前	9
帰宅時	26	帰宅から就寝まで	9
遊ぶ時	23	休みの日	9
起床時	21	起床から出勤まで	7
いつでも	19	よいことをした時	6
決まった時はない	15	手が空いている時	6
家で一緒にいる時	14	叱った後	5
泣いた時・ぐずった時	11	元気がない時	5
かわいいと思う時	10	その他	15
通所・通園時	10	合計(度数)	305

また、どのような時に触れ合っているかという質問に対する自由記述を求めたところ、「子どもが甘えてくる・求める時」が最も多く、「就寝時」「起床時」「いつでも」「家で一緒にいるとき」「帰宅から就寝まで」「起床から出勤まで」など、特別な時間にだけというわけではなく、在宅時は基本的にいつでも触れ合う用意があることを感じさせる回答が多かった(表3-1)。

次に、今回新たに追加した「オムツを替える」「寝かしつける」の2項目について検討する。これらは、日常的に欠くことのできない世話である一方で、上記の項目よりも技術や忍耐が必要な世話であると考えられる。

「オムツを替える」は、頻度においては、ほとんどないという回答が12.7%、気持ちにおいては、すすんでではないがしているという回答が37.0%となっており、スキンシップやお風呂等の世話に比べてやらない人の割合が高く、やっつけてはいても意欲が低い人も多い世話であることが窺える(図3-5)。とは言え、やっている父親の中では、ほとんど毎日という回答が34.8%と最も多く、気持ちにおいても、すすんでしているという回答が45.2%を占めている(図3-5)。

このことから、父親達はオムツ替えを積極的にすべき世話であると感じ、実際、特別な時だけでなく、日常的に参加している人も多いものの、やはり他の世話に比べて排せつ物の処理には負担を感じていると考えられるだろう。

「寝かしつける」については、ほとんどないと回答した人が35.2%と最も多く、次いで週1、2回が31.5%であり、他の世話よりも参加率が低い結果となった。しかし、気持ちにおいては、自分からすすんでしているとできていないがしたいと思っているという回答を合わせると60.9%にのぼり、決して意欲が低いわけではない(図3-6)。この項目ではその他の選択肢を選んで自由記述で回答をした父親が多かったのだが(7.6%)、「先に寝るから」などという生活リズムを理由に挙げる記述は少数にとどまり、ほとんどが「母親でなければ寝ない」「母乳がないのでできない」ためにやりたくてもできないということを訴えるものであった。

これらのことから、父親にとって子どもを寝かしつけることは母親に任せざるを得ない、難しい世話だと認識されていると言ってもよいだろう。

「言葉で叱る」、「叩いて叱る」というしつけに関する項目については、頻度と気持ちに加え

てどんな時にするかを具体的に記述してもらった。まず、「言葉で叱る」の頻度では、週に1、2回が31.8%と最も多く、ほとんどないという回答は17.3%と最も少なかった。しかし、選択肢間に特に大きな差はなく（図3-7上段）、前回の調査からも大きな変化は見られなかった。また、この項目は欠損値が多く、その原因として、子どもの年齢（乳幼児の場合は回答が困難）、頻度で答えることの難しさが影響しているのではないかと考えられた。一方、気持ちについては、すすんでしている人とできていないがしたい人を合わせると約50%、すすんでではないが

している人になりたいとは思わない人を合わせると42.1%となり、前回の調査と同様、しつけに関する考え方がほぼ半分に分かれた形となった（図3-7下段）。どのような時に言葉で叱るかという質問については、言うことを聞かない時、危ないことをした時が多かった（表3-2）。2002年の調査と比較すると、行儀の悪さは依然として上位ではあるものの順位を下げ、親の言うことを聞くかどうか言葉で叱る要因として大きくなってきていることが分かった。「叩いて叱る」の頻度は、ほとんど毎日という回答が0.6%と非常に少なく、ほとんどないという回

- 頻度：ほとんど毎日／気持：自分からすすんでしている
- 頻度：週に3、4日／気持：すすんではないがしている
- ▨ 頻度：週に1、2回／気持：できていないが、したいと思っている
- 頻度：ほとんどない／気持：したいと思わない
- ▨ その他
- ⊠ 欠損値

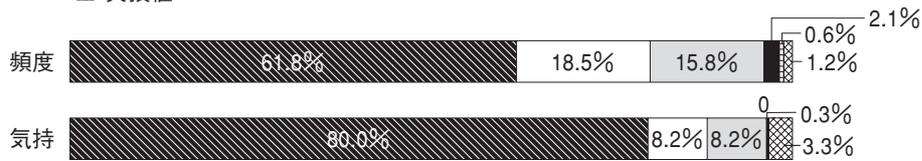


図3-4 子どもをだっこしたり、スキンシップをする

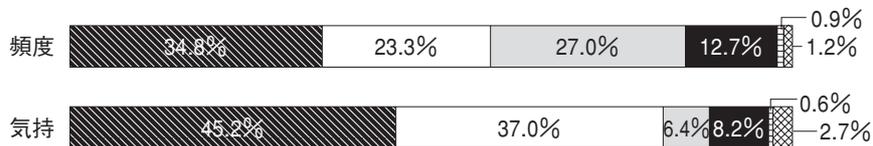


図3-5 子どものオムツを替える

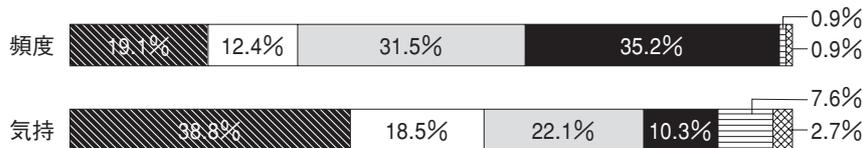


図3-6 子どもを寝かしつける

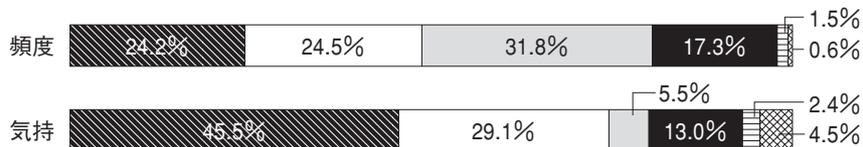


図3-7 子どもを言葉で叱る

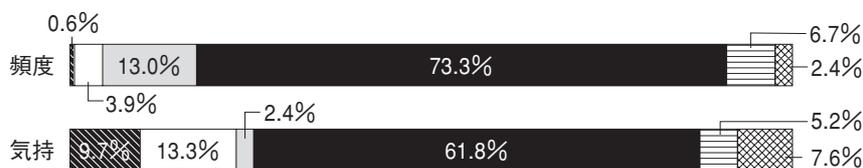


図3-8 子どもを叩いて叱る

答が73.3%と非常に多かった（図3-8上段）。その他という選択肢を選び、一度も叩いたことがないことや、なぜ叩くのかという理由をわざわざ主張する記述もいくつか見られ、叩くことへの抵抗感が感じられる結果となった。

気持ちにおいても、したいとは思わない人が61.8%と多く、叩かずにしつけをしようとしている父親が多いと考えられる（図3-8下段）。この結果は前回の調査とほぼ同じであった。

どのような時に叩いて叱るかでは、人を傷つけた時、口で言っても聞かない時、危ないことをした時などが挙げられ、前回の調査と同様の結果が得られた（表3-3）。また、ここでも叩くことはしないと記述したり、叩かざるを得ない理由を述べたりする父親が少なからずおり、叩くことへの抵抗感が強く感じられる結果となった。

最後に、妻に対するサポートについて尋ねる「家の仕事を分担して手伝う」、「子育てにつ

て夫婦で話し合う」という項目、また家族以外との関わりを尋ねる「子育てについて知人と話をする」という項目について見てみたい。

まず、「家の仕事を分担して手伝う」の頻度は、ほぼ毎日が34.5%と最も多く、週1、2回まで含めると、何らかの形で分担している父親が80.2%に上る（図3-9上段）。これは前回の調査の65.1%を15ポイント上回る大幅な増加となった。

気持ちについても、したいとは思わないと答えた人が9.1%で前回の調査より6ポイント減り、自分からすすんでしていると答えた人が44.5%で14ポイント増えている。妻に対する積極的なサポートがなされるようになってきたと言えるだろう。

また、「夫婦で話し合う」についても、頻度は非常に高くなっており、週1、2回まで含めると、話し合うと答えた割合が83.4%で2002年より約11ポイント増加し、その分、ほとんどない

表3-2 どのような時に言葉で叱るか（複数回答あり）

言うことを聞かない時	37	やるべきことを渋る時	14	嘘をついた時	6	
危ないことをした時	34	人に迷惑をかけた時	13	言葉遣いが悪い時	5	
悪いことをした時	32	片づけをしない時	11	しつこい時	4	
食事のマナーが悪い時	32	物を投げる・乱暴に扱う時	11	あいさつをしない時	4	
約束・ルールを守らない時	20	度を超してふざけた時	10	母親の手に負えない時	2	
人を叩いた時	14	モラルに反する時	7	ゲームのしすぎ	2	
行儀が悪い時	14	わがままを言う時	6	その他	14	
					合計（度数）	292

表3-3 どのような時に叩いて叱るか（複数回答あり）

人を傷つけた時	26	人に迷惑をかけた時	4
口で何度言っても聞かない時	22	物を投げた・乱暴に扱った時	3
危ないことをした時	20	叩くことで伝えなければならないと思った時	3
叩くことはしない	13	片づけができない時	2
きょうだいげんかをした時	9	度を越した時	2
言うことを聞かない時	6	行儀が悪い時	2
同じ悪いことを何度もした時	5	ルール・約束を守らない時	2
嘘をついた時	4	その他	11
食事のマナーが悪い時	4	合計（度数）	138

と答えた割合が14.5%で約10ポイント減少している。気持ちも自分からすすんでしたいと答えた割合は39.7%で前回調査より約10ポイント増加し、したいとは思わないと答えた割合は1.5%で約5ポイント減少している。

このことから、父親の妻に対するサポート意識は近年非常に高まってきており、実践されるようになってきていると考えられる。

一方、「知人と話す」頻度については、話す機会がほとんどない人は50.0%、話す機会を持っている人（ほとんど毎日～週1、2回の人を含む）は47.5%で、約半々に分かれる

結果となった（図3-11上段）。2002年の調査では、ほとんど話をしない人の割合が64.5%であったが、今回の調査では14.5ポイントという大幅な減り幅を見せた。気持ちにおいても、自分からすすんで知人と子育てについて話をしていく父親が26.1%にのぼり、前回調査より約12.5ポイント増加している。

これらのことから、父親が家庭の内外で子育てについて話し合う機会は増えてきており、また、子育てについて家庭内外で話したいと考えている父親も増えてきていることが窺える。

- 頻度：ほとんど毎日／気持ち：自分からすすんでしている
- 頻度：週に3、4日／気持ち：すすんではないがしている
- ▨ 頻度：週に1、2回／気持ち：できていないが、したいと思っている
- 頻度：ほとんどない／気持ち：したいと思わない
- その他
- ⊠ 欠損値

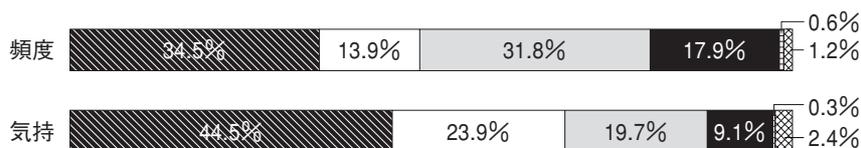


図3-9 家の仕事を分担して手伝う

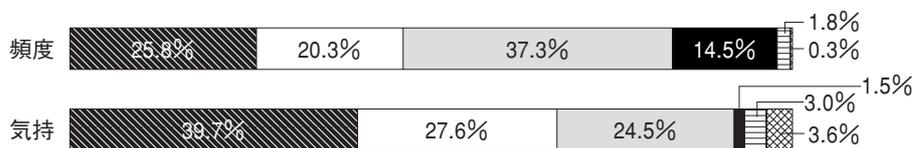


図3-10 子育てについて夫婦で話し合う

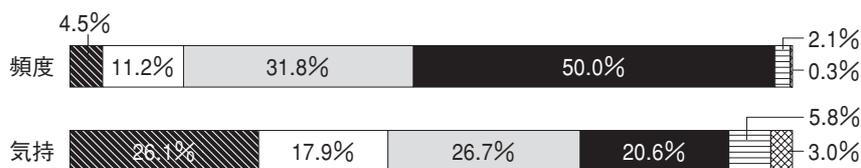


図3-11 子育てについて知人と話す

第4章 子育てをめぐる意識について

1. 子育てをする父親の気持ち

図4-1は、子育てをめぐる気持ちや考えに関する全18項目の質問（4件法）への回答を示したものである。

(1) 子育てをめぐる肯定的な思い

「毎日の子育てが楽しい」に「非常にそう」「まあまあそう」と答えているのは91.5%、「子育てが好きだ」は同87.5%、「子育ては面白い」は同91.8%と、父親のほとんどが子育てに対して「楽しい」「好き」「面白い」という気持ちを

もっている。一方で「『子育てをしている』と実感する」では「非常にそう」「まあまあそう」は76.6%と先の3つの問いに比べて少なくなっているようである。子育てに対して肯定的なイメージや気持ちを抱きながらも、それが「実感」と呼べるほどの強さを持って感じられてはいない父親が一定数いることが考えられる。

「子どもの成長している姿を見るのが嬉しい」に「非常にそう」「まあまあそう」と答えているのは99.1%、「子どもに愛情を感じている」は同99.7%と、これらの問いにはほぼ全てが肯

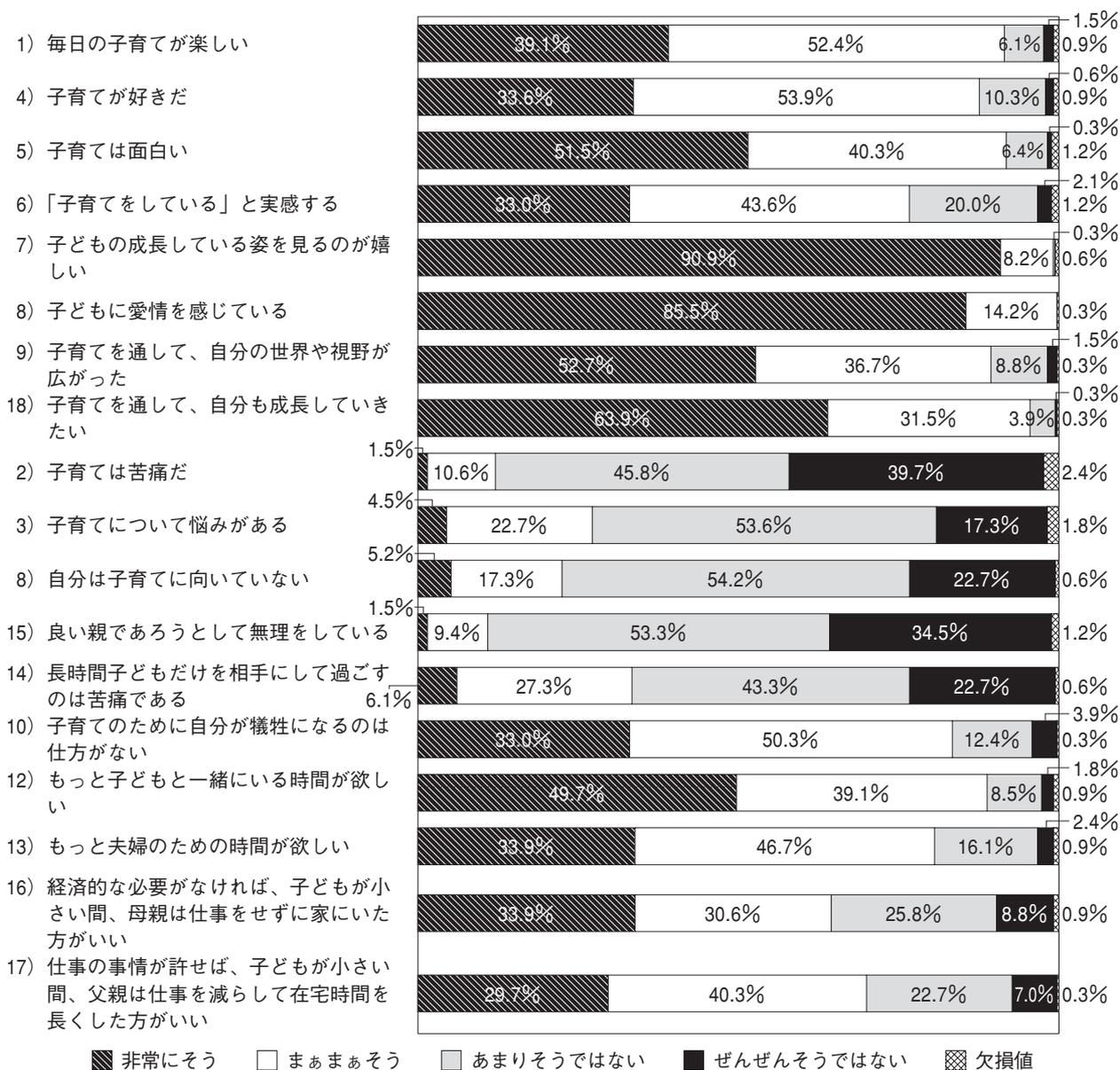


図4-1 子育てをする父親の気持ち

定している。また「子育てを通して、自分の世界や視野が広がった」に「非常にそう」「まあまあそう」と答えているのは89.4%、「子育てを通して自分も成長していきたい」は同95.4%であった。父親のほとんどが子どもの成長だけでなく、子育てを通じた自分自身の変化・成長を感じたり望んだりしていることがわかる。

(2) 子育てをめぐる否定的な思い

「子育ては苦痛だ」に「非常にそう」「まあまあそう」と答えているのは12.1%、「子育てについて悩みがある」は同27.2%、「自分は子育てに向いていない」は同22.5%、「良い親であろうとして無理をしている」は同10.9%と、子育てに対して苦手意識や、無理をしているという感覚を抱く父親が少なからずいることがわかる。「長時間子どもだけを相手にして過ごすのは苦痛である」に「非常にそう」「まあまあそう」と答えているのは33.4%で、子育てという営みを全体的にイメージしたときには特に苦痛とは思わなくても、子どもだけを相手に長い時間を過ごすときには苦痛を感じる父親が一定数いることがわかる。また、「子育てのために、自分が犠牲になるのは仕方がない」に「非常にそう」「まあまあそう」と答えているのは83.3%であった。

(3) 家族のための時間について

「もっと子どもと一緒にいる時間が欲しい」に「非常にそう」「まあまあそう」と答えているのは88.8%、「もっと夫婦のための時間が欲しい」は同80.6%であった。多くの父親が、もっと子どもや妻と過ごす時間を欲しいと思っていることがわかる。

また、「経済的な必要がなければ、子どもが小さい間、母親は仕事をせずに家にいた方がいい」に「非常にそう」「まあまあそう」と答えているのは64.5%、「仕事の事情が許せば、子どもが小さい間、父親は仕事を減らして在宅時間を長くしたほうがいい」は同70.0%と、父母ともに（諸々の事情が許せば）子どもが小さい

間は仕事よりも育児のための時間を優先する方が良いと考える父親が多数派であった。

2. 仕事・家庭の状況と子育て意識の関連

仕事や家庭の状況（子どもの預け先・職業・週休・帰宅時間・母親の職の有無）と子育てをめぐる意識との関連を検討するため、ケンドールの順位相関係数（週休・帰宅時間）、クラスカル・ウォリスの検定（職業）、マン・ホイットニーの検定（子どもの預け先・母親の職の有無）を用い、先の18項目の回答について分析した。

週休と帰宅時間については統計的に有意な相関は見出されなかったが、職業、子どもの預け先、母親の職の有無については統計的な有意差が見出された項目があった。

(1) 職業との関連

職業（会社員245名・公務員32名・自営業31名の3条件）によって回答の全体的分布に差があるかどうか、クラスカル・ウォリスの検定を行ったところ、「子育てを通して、自分の世界や視野が広がった」の問いで有意差（ $p < .05$ ）が見られ、会社員よりも自営業の回答者の方が、「非常にそう」の側に偏った分布となっていた。

会社員と自営業者を比べると、自営業者の方が、出勤や帰宅の時間を子育ての都合に合わせてやすかったり、自宅が仕事を兼ねている場合があるなど、子どもができることで仕事も含めた日常生活のペースが大きく変化することが多いのではなかろうか。一方、定時出勤が求められ、帰宅時間も家庭の事情で変更しにくい会社員の場合は、子どもができることで生じる仕事のペースや環境の変化は比較的小さいのではないと思われる。子どもができることで生じる仕事も含めた生活の変化の大きさが回答に影響しているものと考えられる。

(2) 子どもの預け先との関連

子どもが日中過ごす場所（保育所（園）195名・幼稚園126名の2条件）によって回答の全

体的分布に差があるかどうか、マン・ホイットニーの検定を行ったところ、10項目で有意な差がみられた。

子どもの預け先が保育所（園）である回答者の方が「非常にそう」の側に偏った分布となっていたのは「毎日の子育てが楽しい」（ $p < .001$ ）、「子育てが好きだ」（ $p < .001$ ）、「子育ては面白い」（ $p < .01$ ）、「『子育てをしている』と実感する」（ $p < .001$ ）、「子どもの成長している姿を見るのが嬉しい」（ $p < .01$ ）、「子育てを通して、自分の世界や視野が広がった」（ $p < .05$ ）、「子どもに愛情を感じている」（ $p < .05$ ）、「もっと子どもと一緒にいる時間が欲しい」（ $p < .05$ ）の8項目であった。

子どもの預け先が幼稚園である回答者の方が「非常にそう」の側に偏った分布となっていたのは「自分は子育てに向いていない」（ $p < 0.01$ ）、「経済的な必要がなければ、子どもが小さい間、母親は仕事をせずに家にいた方がいい」（ $p < .001$ ）の2項目であった。

保育所（園）に子どもを預ける父親の方が、子育てが楽しい・好きだ・面白いという気持ちや、子育てをしている実感を持ちやすいこと、子どもが成長することの嬉しさや子どもへの愛情を感じやすいことがわかる。子育てを通した自分自身の視野の広がりもより強く感じており、こうした子育てをめぐる肯定的な意識が「もっと子どもと一緒にいる時間が欲しい」という思いにつながっているものと考えられる。

一方、幼稚園に子どもを預ける父親は、「自分は子育てに向いていない」という感覚を持ちやすく、「経済的な必要がなければ、子どもが小さい間は母親は仕事をせずに家にいた方がいい」と思う人の割合が高いことがわかる。

保育所（園）に通う子どもの家庭では、共働きであることなどから、直接子どもに関わり世話をするという形で父親が家族の中で子育てに果たす役割分担は大きくなるものと考えられる。一方、幼稚園に通う子どもの家庭では、母親が専業主婦であったり、父母以外に子どもの世話をできる人手があるなどの要因から、父親が子

育てに果たす直接的な役割は相対的に小さくなることが想定できる。家族の中でどの程度子育ての直接的役割を分担しているかということが、父親の子育てをめぐる意識のありかたに大きく影響しているものと考えられよう。

(3) 母親の職の有無との関連

子どもの母親が職業についているかどうか（職業についている198名・職業についていない131名の2条件）によって回答の全体的分布に差があるかどうか、マン・ホイットニーの検定を行ったところ、8項目で有意な差がみられた。

子どもの母親が職業についている回答者の方が「非常にそう」の側に偏った分布となっていたのは「毎日の子育てが楽しい」（ $p < .001$ ）、「子育てが好きだ」（ $p < .001$ ）、「子育ては面白い」（ $p < .01$ ）、「『子育てをしている』と実感する」（ $p < .001$ ）、「もっと子どもと一緒にいる時間が欲しい」（ $p < .05$ ）の5項目であった。

子どもの母親が職業についていない回答者の方が「非常にそう」の側に偏った分布となっていたのは「子育ては苦痛だ」（ $p < .01$ ）、「自分は子育てに向いていない」（ $p < .05$ ）、「経済的な必要がなければ、子どもが小さい間、母親は仕事をせずに家にいた方がいい」（ $p < .001$ ）の3項目であった。

妻が職業についている父親の方が、子育てが好き・面白いという気持ちや子育てをしている実感を持ちやすく、「もっと子どもと一緒にいる時間が欲しい」と考えていること、妻が職業についていない父親の方が子育てが苦痛だ・子育てに向いていないという感覚を持ちやすく、「経済的な必要がなければ、子どもが小さい間は母親は仕事をせずに家にいた方がいい」と思う人の割合が高いことがわかる。

有意差がみられた項目に多少違いはあるものの、子どもの預け先との関連でみたのと同様、父親が普段の子育てにどの程度直接の関わりを持つかということが大きく影響しているものと考えられる。

3. 自由記述の内容分析

子育てをめぐる意識についての全18項目の質問（4件法）のうち、次の3項目については「非常にそう」「まあまあそう」と答えた人に、自由記述欄にも回答してもらっている。

毎日の子育てが楽しい：どのようなことが楽しいですか。ご自由にお書きください。

子育ては苦痛だ：どのようなことが苦痛ですか。ご自由にお書きください。

子育てについて悩みがある：どのようなことでお悩みですか。ご自由にお書きください。

これらの自由記述の内容を分析し、類似したものを集めていくつかのカテゴリーを作り、分類する作業を行った。その結果を以下に示す。

(1) 楽しいこと

子育てで楽しいことについて書かれた275名分の記述内容の分類結果を表4-1に示す。各カテゴリーの具体例は次のとおりである。

「子どもの成長・変化」

- ・日々の成長を見るのが楽しい。
- ・子供の日々の変化がおもしろい。将来を想像すると楽しみ。
- ・成長に従いできることが広がること。反応が個性的になってゆく様子を見てとれること。
- ・ひとつひとつできることが増えていくこと。
- ・できないと思っていたことができるようになったり、食べる量が増えて身体が大きくなったり、といった変化が楽しいと思う。

「笑顔・笑い声・嬉しそうな様子」

- ・子供が楽しそうにしている様子、笑顔、笑いごえを聞けることがたのしい。
- ・大変だが、子供の笑顔が見れるのが楽しい。
- ・子供たちが楽しそうにしているのが楽しい。
- ・子供が、うれしそうに笑ってるのを見た時。

「言葉・会話・コミュニケーション」

- ・おしゃべり
- ・子供と話す時に、子供が保育園での出来事など、いろんな話をしてくれる時。
- ・会話するだけでも楽しいし、思ってもないしっかりした意見を言うのを見ると嬉しい。

表4-1 子育てで楽しいこと

(275名の記述から・複数回答あり)

カテゴリー	度数
子どもの成長・変化	158
笑顔・笑い声・嬉しそうな様子	38
言葉・会話・コミュニケーション	37
一緒に遊ぶ	28
子どもがいるだけで・全部	19
慕ってくる・頼ってくる	16
子どもがかわいいこと	12
新たな気づき・発見	12
思わぬ発想・想像できないこと	11
子どものしぐさ・行動	10
子どもの反応	9
一緒に出かける・散歩	6
自分自身の成長・変化	5
スキンシップ・ふれあい	4
子どもの無邪気さ・純粋さ	4
その他	13
合計	382

- ・子育てをする事でコミュニケーションをとれている実感があるから。
- ・子どもが保育所のことを言ったり、自分が仕事のことをかみくだいてしゃべるとき。

「一緒に遊ぶ」

- ・一緒にあそぶこと。
- ・男の子のため、少しずつ大きくなり、いっしょに遊べるようになってきたため。
- ・公園でサッカーをしたり、らくがき（絵を描いたり）したりすることが楽しいです。ウルトラマンのかいじゅうが好きで、かいじゅうごっこをしたりしている。

「慕ってくる・頼ってくる」

- ・何だかんだ言って、結局自分を慕ってくれること。
- ・子供が自分を頼りにしてくれる。
- ・無条件で親を頼ってくれる時期はそう長くはないと思っている。

「子どもがいるだけで・全部」

- ・一緒に家族みんながいるだけでたのしい。特に何がといったことはない。
- ・わからない。一緒にいるだけで幸せ。

- ・子供という時すべて
- ・全部
- ・子どもの存在

「子どもがかわいいこと」

- ・かわいいと思ったとき。
- ・普通にかわいい。
- ・本当にかわいい。

「新たな気づき・発見」

- ・日々新しい発見が見られる
- ・おもしろい。新たな発見がいろいろ
- ・子供のそんざいが楽しく目あたらしいはっけんがある。

「思わぬ発想・想像できないこと」

- ・子どもならではの新鮮な見方に驚いたり、笑ったりできること。
- ・大人の想像を超える言動や行動。
- ・大人が思いもよらない行動をとったり、考えもしない発想を聞けると「すごいなあ！」と思い、子供がいる事に幸せを感じます。

「子どものしぐさ・行動」

- ・子供の行動すべてが興味深い
- ・まだ甘えてくるときのしぐさ等、子供の一挙手一投足が楽しい。

「子どもの反応」

- ・子どもの反応や成長。
- ・自分のしたことに反応があること。

「一緒に出かける・散歩」

- ・休日散歩に一緒に出かけるとき。
- ・買い物や食事に行っているとき。
- ・親子でお弁当持って住吉川まで散歩して食べてまた散歩…何も無いけど、今日も一日楽しかったナ…と思える。

「自分自身の成長・変化」

- ・世界観の変化（自身の）
- ・子どもの成長を通して、自分の成長を感じる事ができること。
- ・子供の成長に合わせて、自分も刺激を受け、成長していこうと思うことがあり楽しい。

「スキンシップ・ふれあい」

- ・子供とスキンシップすることがたのしい。
- ・子どもとのふれあい

「子どもの無邪気さ・純粹さ」

- ・子供の無邪気な所
- ・素直さが分かるから
- ・感情表現が素直な所が見られる時

以下、（ ）内の数字はそのカテゴリーに分類された記述の数である。楽しいこととしては、「子どもの成長・変化（158）」を挙げるものが圧倒的に多かった。子どもの成長への気づきが、子育てを楽しいものになっていることがわかる。

次に多かったものは「笑顔・笑い声・嬉しそうな様子（38）」であり、子どもが楽しんでいることがそのまま父親にとっての楽しさへとつながっていることが感じられる。

「言葉・会話・コミュニケーション（37）」「一緒に遊ぶ（28）」「慕ってくる・頼ってくる（16）」「子どもの反応（9）」「一緒に出かける・散歩（6）」「スキンシップ・ふれあい（4）」の各カテゴリーに分類された記述は、子どもと向き合ったり一緒に何かをすることで生じる子どもとの精神的また身体的な相互作用に焦点があたっている記述であると考えられる。この5つのカテゴリーのいずれかに該当した回答の実数は90で、子どもとの間で何らかの「やりとり」が生じることも、子育ての楽しみの大きな要素になっていることがわかる。

「子どもがいるだけで・全部（19）」「子どもがかわいいこと（12）」「子どものしぐさ・行動（10）」「子どもの無邪気さ・純粹さ（4）」の各カテゴリーに分類された記述は、子どもがいるという事実や、子どもという存在のありように焦点があたっている記述であると考えられる。この4つのカテゴリーのいずれかに該当した回答の実数は43であった。子どもが子どもらしいありようでそこにいるということ自体を楽しいとを感じる気持ちも、父親の子育てをめぐる意識のあり方として大切なもののひとつであると思われる。

「新たな気づき・発見（12）」「思わぬ発想・想像できないこと（11）」「自分自身の成長・変化（5）」の各カテゴリーに分類された記述は、

子どもと生活する中で新しい刺激を受けることや、それによって自分自身が変わっていくことに焦点があたっている記述であると考えられる。この3つのカテゴリーのいずれかに該当する回答の実数は24であった。子どもと生活する中で、子どもから刺激を受け自分が変わっていくことを感じるのも子育ての楽しみの一つであるといえよう。

日常の具体的なエピソードに触れられた回答も散見され、子どもとの生活のひとコマを楽しんでいる父親の様子が伝わってくるようである。

(2) 苦痛なこと

苦痛なことについて書かれた38名分の記述内容の分類結果を表4-2に示す。各カテゴリーの具体例は次のとおりである。

「時間がない・休みがない」

- ・毎日忙しすぎて、自分の時間が全くない
- ・やはり睡眠時間や自由時間が少なくなる時には、そう思ってしまう。
- ・心身が休まるときがない、自分のしたいことができない。

「言うことを聞かない・しつけ」

- ・言うことを聞かない（聞かせられない）
- ・やはり、言うことを聞いてもらえない時は、しんどい。
- ・しつけの難しさ

「思うようにならない」

- ・思い通りに育たない。
- ・思うようにいかないことが多いこと。
- ・自分の思った通りの行動は制限される。ある意味仕方がないことだとは思いますが…。

「泣く理由がわからない」

- ・赤ちゃん時は言葉が話せない為、何で泣いているのかわからなかった事がしんどかった。
- ・理由がわからず泣きつづけるのをなだめるとき

苦痛を感じる事としてあげられたものの内容は「時間がない・休みがない (14)」が最も多く、回答者が時間の余裕がない中で子育てに取り組んでいる実情が伺われる。

表4-2 子育てで苦痛なこと
(38名の記述から・複数回答あり)

カテゴリー	度数
時間がない・休みがない	14
言うことを聞かない・しつけ	8
思うようにならない	3
泣く理由がわからない	2
その他	12
合計	39

次が「言うことを聞かない・しつけ (8)」で、これは次の子育てについての悩みの自由記述でも多くあげられているものである。以下、「思うようにならない (3)」「泣く理由がわからない (2)」という内容があげられた。

(3) 悩み

子育てについての悩みについて書かれた84名分の記述内容の分類結果を表4-3に示す。各カテゴリーの具体例は次のとおりである。

「自分の育て方でよいかどうか」

- ・今の子育てで子どもがしっかりと成長していくのか不安
- ・経験してない事が多いので、何が正解かわからない。
- ・自分のやっている子育てはまちがっているのではないかと日々考える。
- ・バクゼンと、今の子育てでいいのかどうか不安がある。(正解はないと思いつつ、このままで大丈夫かなあと心配)

「言うことを聞かない・しつけ」

- ・やってはいけないことをやってしまう。何回も言い聞かせているが、子供はわかっていないよう。
- ・叱り方、教え方など…
- ・しつけが難しい。どの程度きびしく、又は甘くすればよいか！
- ・子供が理解してくれるような話、指導をすることが難しい。

「将来」

- ・将来について
- ・この先の日本の行く末、子供の成長の方向など。

- ・悩みと言うよりも、将来への漠然たる不安という感じです。何をしてあげられるのだろう、と思うのだが、具体的な回答が出てこない。

「発達・障害・病気」

- ・3歳だが他の子供に比べ言葉がおそい。
- ・小さく未熟児で生まれたので、人並みに成長してくれるかどうか心配になる時がある。
- ・自閉や知的について（今後）
- ・ぜんそく
- ・先天的な病気を持っており、定期的に通院しており、経過が心配。

「教育」

- ・今後の教育について（方向性・費用）
- ・勉強、進学。

「自己主張・性格」

- ・子どもの反抗が強い
- ・三女は自我が強く、成長の一環でしょうが手こずります。
- ・自己主張が苦手
- ・子どもの性格のこと

「保育所や幼稚園での関係」

- ・保育園に行くのが辛そうだから。
- ・保育所に慣れず、親と離れる時、子供が号泣すること。
- ・幼稚園でみんなと仲良くしているか、先生の言う事を聞いているか等。

「金銭・経済面」

- ・金銭的な事
- ・子育てというより、お金の面では、いつまでも不安は残ってくると思う

「寝てくれない」

- ・早く寝てくれない
- ・夜、寝ないこと

「妻の負担」

- ・妻に負担が多くかかっていること。何とかしたいが限界もある。
- ・一緒にいる時間が少ない為、妻に負担をかけすぎていないか？

「全て・いろいろ」

- ・全てにおいて悩みはつきない。が、それがあたりまえとうけとめている。

表4-3 子育てで悩んでいること
(84名の記述から・複数回答あり)

カテゴリー	度数
自分の子育てでよいかどうか	15
言うことを聞かない・しつけ	15
将来	15
発達・障害・病気	11
教育	5
自己主張・性格	5
保育所や幼稚園での関係	4
金銭・経済面	4
寝てくれない	3
妻の負担	2
全て・いろいろ	2
その他	13
合計	94

- ・いろいろ。

子育てについての悩みでは、度数が15と最も多かったカテゴリーが3つあった。「自分の子育てでよいかどうか（15）」に分類された記述には「正しいか」「間違いがないか」というような記述が目立ち、育て方や接し方についてのモデルや正解を求めるような気持ちや、自分の育児に自信を持てずにいる様子が伺われる。

「言うことを聞かない・しつけ（15）」に分類された記述からは、「何度言っても聞かない」など叱り方、しつけ方に苦慮している様子がわかる。就学前の子どもを育てる中で、特に小さな子どもを叱る、しつけるという場面は難しさを感じやすいところであると思われる。「将来（15）」に分類された記述には、「子供の発達にハンディキャップがあり将来が心配」といったように、「発達・障害・病気」のカテゴリーにも該当する記述が3つ見られた他は、漠然と将来が不安であるとするものが多かった。

また、「発達・障害・病気（12）」では、障害の内容として発達障害があることが記述からわかるものが4つ、未熟児としての出生について触れるものが2つあった。

「教育（5）」には、「金銭・経済面」のカテゴリーにまたがるものが2つみられ、教育に関

する悩みについてはその費用面での不安も無視できないことがわかる。

「自己主張・性格 (5)」に分類された記述は子どもの反抗や自我の強さ、またそれとは反対に自己主張が苦手なことを心配するもの、「保育所や幼稚園での関係 (4)」に分類された記述

は保育園に慣れないことや、まわりの友達となじめているのかどうかを心配するものである。

その他複数の記述があったカテゴリーは「金銭・経済面 (3)」「寝てくれない (3)」「妻の負担 (2)」「全て・いろいろ (2)」であった。

第5章 父親の役割と実感をめぐって

1. 父親の役割をめぐる父親の意識

(1) 質問項目への回答から

図5-1は父親の役割に関する、全10項目の質問への回答（4件法）を示したものである。

「理想的な父親のイメージを自分なりに持っている」について、「非常にそう」あるいは「まあまあそう」と答えているのは44.8%、「自分は理想的な父親だと思う」に「非常にそう」「まあまあそう」と答えているのは33.0%であった。自分の中に理想の父親イメージを持っている父親は、半分に満たないことになり、自分が理想的な父親であると思っている人の割合は、全体の3分の1にとどまった。

また、「子育てをする上で、父親と母親の役割に差はないと思う」に「非常にそう」「まあまあそう」と答えているのは34.9%、「子育てにおいて父親はなくてはならない存在である」に対しては同じく90.0%、「子育てにおいて母親（妻）にはかなわないと思う」に対しては同じく79.7%となった。およそ3分の2の父親が、父親と母親では役割に違いがあると考えており、9割の父親が、父親は子育てになくてはならないとしつつも、8割が「母親にはかなわない」と答えている。

と答えている。多くの父親が、父親独自の役割があると考えてはいるが、子育てにおいては母親の方が重要な役割を果たすと感じている。

「子どもがある程度大きくなってからが父親の出番」に「非常にそう」「まあまあそう」と答えているのは、22.1%であった。今回の調査に先立って行った、父親へのインタビューにおいて「子どもが小さいうちは父親はいなくてもいい」といった発言があったため、この質問項目を盛り込んだが、今回の結果ではそのような意見は2割程度となった。子どもが小さいうちから関わろうとする父親の姿勢が表れている。

「他の父親の子育てが気になる」に「非常にそう」「まあまあそう」と答えているのは32.8%であり、他の父親の子育てを気にしていない人のほうが多いことが示唆された。他人の子育てと比較したり、それを参考にしたりしようとする意識はそれほど高くはないようである。

さらに「子育てにおいて父親にしかできない（母親にはできない）ことがある」に「非常にそう」「まあまあそう」と答えているのは、65.2%であった。3分の2の父親が、父親には独自の役割があると答えていることになる。

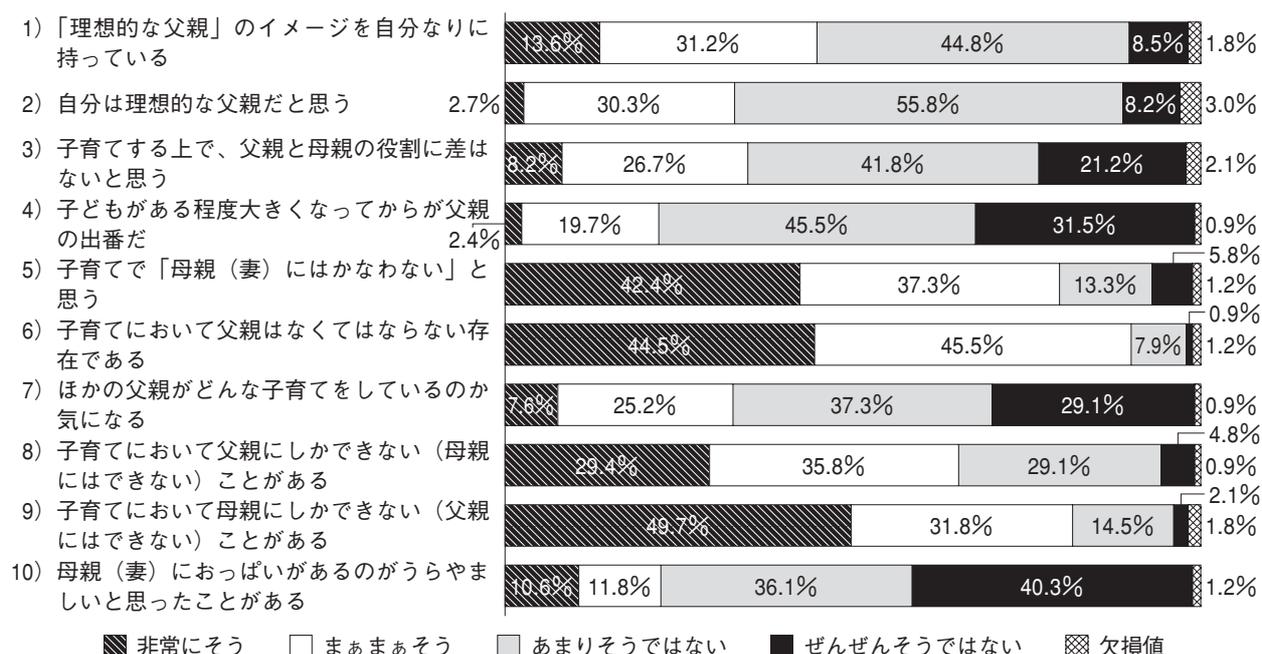


図5-1 父親の役割をめぐる意識

「子育てにおいて母親にしかできない（父親にはできない）ことがある」には同じく81.5%であった。

さらに、「母親（妻）におっぱいがあるのがうらやましいと思ったことがある」に「非常にそう」「まあまあそう」と答えている父親が、22.4%いた。これも、先行して行ったインタビューの中で「(子どもを泣きやますのに) おっぱいは必殺技」といった発言があったため盛り込んだ質問項目であった。おっぱいを「うらやましい」と思う人が、決して多くはないが、それなりの割合で存在することは興味深い。

全体として見ると、父親が子育てに不可欠で、母親とは違う役割があると、多くの父親が感じていると言える。しかし、理想的な父親とはどのようなものであるかについては、イメージしにくい、あるいははっきりと主張しない人が多いようであり、母親にはかなわないという意識が強いことが示されている。

(2) 自由記述の内容から

以下の4項目については「非常にそう」「まあまあそう」と答えた人に、自由記述欄にも回答してもらっている。

「理想的な父親」のイメージを自分なりに持っている：それはどんな父親ですか。ご自由にお書きください。

子育てにおいて父親にしかできない（母親にはできない）ことがある：父親にしかできないこととは、どのようなことでしょうか。ご自由にお書きください。

子育てにおいて母親にしかできない（父親にはできない）ことがある：母親にしかできないこととは、どのようなことでしょうか。ご自由にお書きください。

母親（妻）におっぱいがあるのがうらやましいと思ったことがある：どのようなときにうらやましいと思いましたか。ご自由にお書きください。

これらの自由記述の内容を分析し、類似したものを集めていくつかのカテゴリーを作り、分

表5-1 理想的な父親
(130名の記述から・複数回答あり)

カテゴリー	度数
時に優しく時に厳しく	20
相談できる・理解ある	13
頼れる	11
遊ぶ・共に過ごす	10
父親の実際の父親	10
手本・見本	9
厳しく	8
あこがれ・尊敬される	8
社会やルール教える	5
必要な時に助ける	5
男性として	5
子どもと同じ目線	5
ずっと好きと言われる	4
揺るがない・ぶれない	4
その他	23
合計	138

類した。その結果を以下に示す。

①理想的な父親イメージ

理想的な父親イメージについて書かれた130名分の記述内容の分類結果を表5-1に示す。

もっとも多かったのは「時に優しく時に厳しく」と名付けられるような内容であり、20名あった。

- ・普段はやさしいが、いざとなったらきびしく
できる

- ・普段は何も言わないが、ここぞという時に、怒れる人。(中略)怒らない時は、優しい人といったものである。続いて「相談できる・理解ある」が13名で、具体例は以下の通り。

- ・子供が父に悩みを打ち明けられるような関係
- ・いつでも相談相手になれる父親

ついで「頼れる」が11名、「遊ぶ・共に過ごす」「父親の実際の父親」が10名ずつで、「頼れる」の例としては

- ・頼りになる父親
- ・いざというときに力になれるお父さん

「遊ぶ・共に過ごす」の例としては

- ・休日に子供と二人で遊んでいる
- ・一緒に遊んだりスポーツできたりする父親

などがある。「父親の実際の父親」はカテゴリー名どおり、アンケート回答者が実在の自分の父親を理想像として挙げたものである。

さらに「手本・見本」が9名「厳しい」と「あこがれ・尊敬される」が各8名であった。この3カテゴリーの例を1つずつ以下に示す。

- ・子供の手本、目標となれる
- ・躰の厳しい昔ながらの頑固おやじ的な
- ・強くてカッコいい。あこがれる

「社会やルールを教える」「子どもと同じ目線」には5名ずつ分類された。それぞれの具体例は次のとおりである。

- ・子供に社会のことや人間関係、ルールなどをきちんと教えらる大人でありたい。
- ・子供目線も持った父親でありたい

「必要なときには」(5名)には

- ・一歩引いて愛情深く見守りながら必要な時には必要なだけ手を貸せる

のように常に手を貸したりサポートしたりするのではなく“必要なときに”というニュアンスが含まれているものを分類した。「男性として」(5名)は

- ・男の生き方
- ・男の子としての悩みを聞く遊びをする

など父親が男性であることを強く意識した回答である。

- ・ずっと好きでいてほしい
- ・いつまでたってもパパパパと呼んでくれる父親になりたい

といった「ずっと好きと言われる」と、

- ・方針がぶれない父親
- ・ゆらぐ真っすぐ

といった「ゆらがない・ぶれない」が4名ずつであった。

全体として分類がしにくく、カテゴリー数が多くならざるを得ない傾向にあった。父親の抱く理想的な父親イメージが、人によって異なり、多様化していることがうかがえる。その中に多く含まれる要素をあえて抽出するとすれば、“受容する”“指導する”といったことであろうか。一番多かった「時に優しく時に厳しく」に

はこの両方の要素が含まれていると言える。さらに、もう1つの要素を挙げるとすれば“姿を示す”であろうか。見本になったり、あこがれの対象になったりするはこの要素を多分に含んでいる。かつての父親は“指導する”あるいは“姿を示す”だけでよかったのだが、最近では子どもの目線で考えたり、仲よく一緒に遊んだりする“受容する”父親が増えていると言えるのかもしれない。

理想的な父親イメージを持っている人が4割強にとどまっていることもあわせて考えると、現代の父親は、理想の父親像をイメージしにくい、言い方を変えれば、画一的な父親像に縛られる必要がない、ということを示しているのではないだろうか。

②父親にしかできないこと

父親にしかできないことについて書かれた173名分の自由記述の分類結果を、表5-2に示す。もっとも多かったのは「体や力」で、この項目の自由記述数全体の3割を超える53名がこの記述をしている。これは

- ・体をつかった遊び、スポーツ
- ・力を使った遊び、高い高い、肩車、飛行機ブーンなど

といった、体や力を使う遊びなどについての記述であり、サッカーやキャッチボールなど、具体的なスポーツ名を挙げているものもここに含めている。父親にしかできないこと、父親の子どもに対する役割として、こうしたことが意識されやすいと言える。

次に多かったのが「男性として」(36名)であった。

- ・父親は男性です。男には男にしか分からない部分がある(中略)息子なので父親にしか理解できないことがあるように思います
- ・我が家は娘二人なので男の子の事を教えるのは父親の役目だと思う

のように、父親が男性であることを強く意識している回答がここに含まれる。中でも、息子と同性同士の話をし、息子に男性の生き方を教

えるといったものが目立った。

「厳しくする」がそれに次いで23名であった。

- ・きつくしかる
- ・年に数回カミナリを落とす

といったものがこのカテゴリーに含まれる。やはり厳しくしかるのは父親の役割と考えている人が比較的多いようである。

以下、「体を使わない遊び」（8名）

- ・動物や昆虫との触れ合いなどは父親の方が向いていると思う

「社会やルールを教える」（7名）

- ・論理や倫理等の社会性を身につけ、かつ、世界を通じて現代の日本に生きてゆくすべを身につけさせる能力をコーチする事

と続いている。

父親にしかできないことがある、と4件法には回答しながらも、いざその内容を記述すると

- ・説明できないがあると思います
- ・何と限定できないが、生物の本能で、何か役割があるはず

のようになってしまう（「わからないがある」人も7名いた。さらに、

- ・父親としての姿を見せる事
- ・社会的責任を背負っている姿を見せる

など、何かをするというよりも、「姿を見せる」という表現をしている人が5名いた。そして、

- ・感情的につい怒ってしまう母親と違い、落ち着いて子どもに注意したり、叱ったりできる事
- ・母親の様に細かい注文を付けずに大らかに対することができる点

といった「落ち着いた対応」も4名見られた。

上位3つのカテゴリー「体や力」「男性として」「厳しくする」だけで、この項目の自由記述数全体の3分の2程度を占めている。理想的な父親イメージが分散しているのとは対照的であり、この3つに共通しているのは、いわゆる旧来の“男らしさ”や“男性性”に含まれるような内容ということではないだろうか。その中でも、もっとも多いのは精神的な面ではなく、「体や力」であることが特徴的と言える。理想

表5-2 父親にしかできないこと
(173名の記述から・複数回答あり)

カテゴリー	度数
体や力	53
男性として	36
厳しく	23
体を使わない遊び	8
社会やルールを教える	7
わからないがある	7
姿を見せる	5
大きな視点	4
その他	43
合計	186

的な父親イメージにもそうした“男性性”の要素は入っているが、それだけではなく、むしろ優しさなどの“受容する”要素が目立っている。

③母親にしかできないこと

母親にしかできないことについて書かれた203名分の自由記述の分類結果を、表5-3に示す。もっとも多かったのは「母性（説明あり）」で29名であった。これは

- ・母性的な優しさで安心感を与える
- ・母性で最大に子供を愛すること。男では出せない愛情が母にはあると思います

のように、「母性」やそれに近い表現を用いて、その内容を説明しているものを分類したカテゴリーである。これに対して「母性（説明なし）」(14名)は

- ・母性愛
- ・母性本能といいますか…

といった、ずばり“母性”やそれに準じた単語のみを書いて説明のないものとした。そして、

- ・原初的安心感
- ・子が求める母のあたたかさ

のように、“母性”という語は使用しないものの、おそらく“母性”という語に含まれる意味を言い表していると思われる、短くて説明の少ない記述を「母性らしきもの」(17名)とした。

さらに、妊娠出産と母性を結び付けて記述しているものを「出産で説明する母性」としたと

ころ、8名の記述が該当した。例としては以下のようなものがある。

- ・父親（男）には感じる事が出来ないお腹の中にいる時からの愛情があるので、「母親にしか与えられない」愛情があると思う

同様に、授乳と母性を結び付けて記述している人（「授乳で説明する母性」）が16名いた。

- ・授乳。それにともなう母親との結びつきにはかなわない
- ・母乳をあげるなど、根本的なつながり

ここまで挙げた5つのカテゴリーはすべて「母性」としてまとめることが可能であろう。「母性」を記述した人の合計は、84名に上る。

また、以下のように、授乳について、母性と結びつけたりするような意味付けや説明がなく、単に「授乳」としている人も26名あった。

- ・授乳
- ・母乳を与える

「授乳で説明する母性」と単なる「授乳」とをあわせた大分類の「授乳」は42名であった。

「母性」や「授乳」以外で多かったのは「女性として」（25名）と「日常の世話や配慮」（24名）であった。前者の具体例は

- ・娘だから、子供から大人になるまでの女性としての生き方を学ぶ
- ・女性としての見方や教え方

のようなものであり、母親が女性であることを意識した回答をここへ分類している。また、後者の具体例は

- ・食事などの身の回りの世話
- ・細やかな体調管理と日々の変化に気付いてあげる事

などである。この中でも食事を与えることについて触れている人が11名と半数近くに上った。

- ・子育ては全体のほとんどの事がやはり母親でないと多い
- ・すべてのこと

といった「ほとんど・すべて」に分類できる回答が5名、

- ・説明できないがあとと思います
- ・分からないけれど…

表5-3 母親にしかできないこと
(203名の記述から・複数回答あり)

	カテゴリー	度数
母性 計84	母性（説明あり）	29
	母性（説明なし）	14
	母性らしきもの	17
	出産で説明する母性	8
授乳 計42	授乳で説明する母性	16
	授乳	26
	女性として	25
	日常の世話	24
	ほとんど・すべて	5
	わからないがある	4
	叱った後のフォロー	4
	その他	44
	合計	216

といった「わからないがある」が4名あった。

そのほか、「叱った後のフォロー」が4名あり、具体例としては以下の通りであった。

- ・叱って落ち込んだ時、最初に手を差しのべる部分
- ・父親に叱られて、甘えるところがあること

母親にしかできないこととして父親がイメージするのは、まずやはり「母性」や「授乳」といったキーワードで表されるものが多いようである。このあたりが、8割もの父親が「子育てにおいて母親にはかなわない」と思っていることと関係していると考えられる。

④おっぱいがうらやましいと思ったとき

どのようなときに妻におっぱいがあることがうらやましいと感じるかについての58名分の自由記述の分類結果を、表5-4に示す。

もっとも多かったのは「泣きやむ・寝る」（22名）である。具体的には

- ・父親があやしても泣きやまないのが、母親のおっぱいでピタッと泣きやんだ時
- ・子供が寝静まるのが早かった

などである。泣いている子どもを自分ではどうしようもなかったのに、母親のおっぱいで泣きやむ、という体験からおっぱいをうらやましく思う父親が、一定数いるようである。

- ・子供が母親の方になつくので、負けたと感じる

- ・なぜかママがイイと言われる時がある

のようなものを「かなわない」（7名）と分類したが、父親の心境としては「泣きやむ・寝る」と似ているかもしれない。

- ・母性愛を感じた

- ・母親の胸で抱っこされてる姿を見るとそう感じる。『安心』と『希望』が与えられている気がする

のような「母性を感じる」を理由に挙げている人が5名おり、「女性にしかできない」（4名）がそれに続いている。

- ・自分の一部を分け与えているというのが、体で感じるができるため

などの「身体を使う」と「自分も（授乳を）してみたい」も同じく4名であった。

(3) 父親の役割をめぐる父親の意識・まとめ

父親の役割として、父親自身が、力強さや厳しさといった“男性的”なものをイメージすることは多いが、それだけでよしとするわけではなく、むしろ理想的には“母性的”なものも持っていたいと思っていることがうかがえる。しかしそうした“母性”をもって子どもに近づこうとする際には、やはりその面では母親にかなわないという思いが意識化され、引け目を感じている場合もあるのではないだろうか。

表5-4 おっぱいがうらやましいと思ったとき
(58名の記述から・複数回答あり)

カテゴリー	度数
泣きやむ	18
かなわない	7
寝かしつけ	5
母性愛	5
女性にしかできない	4
身体を使う	4
自分もしてみたい	4
その他	13
合計	60

2. 「父親になったと感じた時期」に関して

(1) 父親になったと感じた時期

父親は、いつから生物学的にのみならず、心理的にも「父親」になるのであろうか。

図5-2は、「父親になったと感じた時期」について得た回答である。

「第1子の誕生時」が35.8%（118名）と最も多く、「第1子の誕生後～1歳になるまで」が24.8%（82名）、「第1子の妊娠中」が22.4%（74名）と続いた。

8割以上の父親は、子どもが1歳になるまでに父親になったと感じるようである。

妊娠中から父親になったと感じる父親は、2割以上存在している。とはいえ、妊娠中よりも誕生時以降に父親になったと感じる父親が圧倒的に多い。わが子と実際に対面すること・具体的に関わりを持つことは、父親になったと実感する、重要な契機であることがうかがえる。

一方で、少数ではあるが、「まだよくわからない」と回答した父親も5.2%（17名）存在した。

(2) 自由記述の内容から

次に、父親になったと感じた具体的な時期に関する、自由記述の内容へと目を向ける。

回答のスタイルとして、エピソードでの回答（「妊娠がわかった時」「だっこした時」等）と、特定の時期での回答（「H16.1月」「妊娠6ヶ月以降」等）が見受けられた。

① 「妊娠中」

「父親になったと感じた時期」として、「第

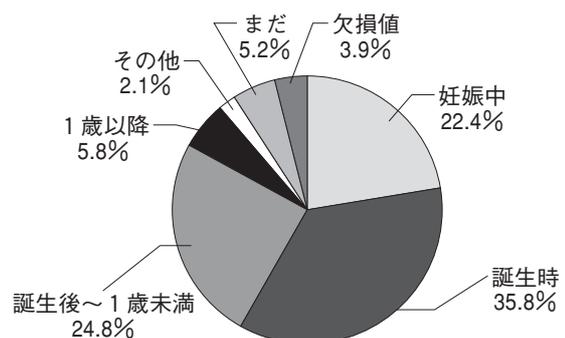


図5-2 父親になったと感じた時期

1子の妊娠中」と回答した父親のうち、自由記述に記入があったのは46名で、図5-3のような内容であった（複数回答あり）。

エピソードでの回答では、「妊娠が判明した時」、「エコーを見た時」、「胎動を感じた時」、「お腹が大きくなってきた時」と続いた。子どもの存在を具体的に知る・感じる事が、父親になった実感を持つことに寄与していることが見て取れる。

さらにエコーの画像や性別が判明することは、子どもが存在していること以上に、わが子がどんな子どもかについてのイメージを豊かにしてくれる。こういった、子どもにまつわる具体的なイメージは、“(まぎれもない、この子の)父親である”という形で実感を湧きあがらせることだろう。医療の発展は、父親になったと実感しやすくなることに一役買っていると思われる。

また、「両親学級に参加した時」「職場に報告した時」「出産準備の買い物をした時」といった、子どもを迎えるにあたっての、父親自身の社会的立場の変化・生活の変化も、きっかけとなっているようであった。子どもは、生まれる前から既に社会的な存在であると言えるのかもしれない。

特定の時期での回答としては、「初期から」(1名)、「3ヶ月」(2名)、「5~6ヶ月」(6名)・9ヶ月(1名)といった回答が見受けられた。エピソードとしては回答されていないが、各々、体験の内容としては、例えば、「妊娠が

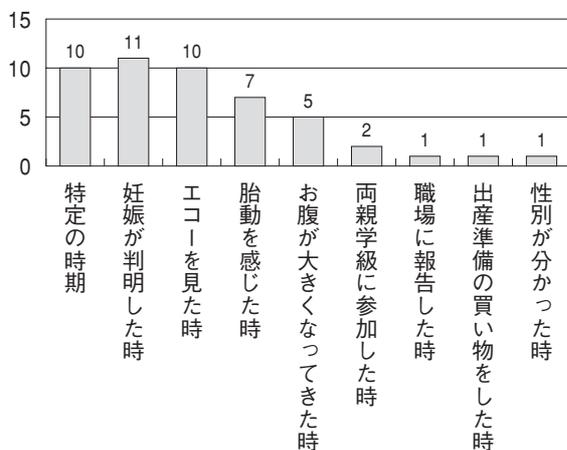


図5-3 父親になったと感じた具体的な時期（妊娠中）

判明した時」「エコーを見た時」「お腹が大きくなってきた時」等の、エピソードでの回答と重なるところもあるのかもしれない。

②「誕生時」

「第1子の誕生時」と回答した父親のうち、自由記述に記入があったのは48名で、図5-4のような内容であった。

エピソードでの回答で最も多かったのは、「生まれた瞬間」と「初めて抱いた・触れた時」であった。まだ見ぬ子どもが、まさにこの世に生まれ出でた瞬間そのものと、生まれ出でた子どもの存在を肌で感じた時である。

「生まれた瞬間」以外の、時間軸にまつわる表現の回答としては、生まれるまでのプロセスも共にする「立会い出産」や、それらのように現在進行形ではなく「出産直後」という、少しタイムラグのある回答も見られた。同じ「誕生時」といっても、実感を持つタイミングや体験様式に違いがあることが見て取れる。

また、「初めて抱いた・触れた」以外の、子どもとの関わり体験にまつわる表現の回答としては、「初めて見た時」が続き、数は少なくなるが、「初めて泣き声を聞いた時」も見受けられた。子どもの存在を、五感を通じて実際に感じることも重要な契機となっているようである。

また、「親に連絡した時」という、社会的立場の変化のエピソードをあげた回答者も存在した。

特定の時期での回答としては「H16. 1月」

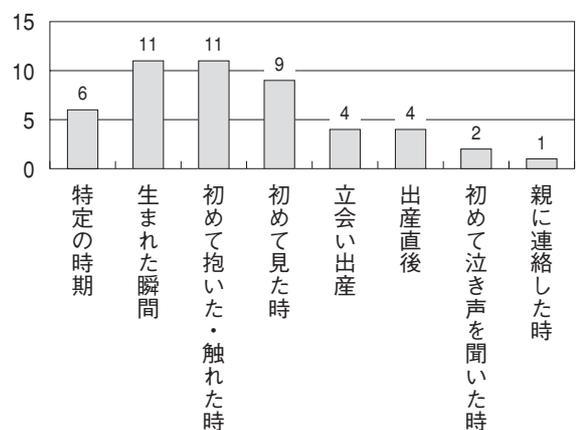


図5-4 父親になったと感じた具体的な時期（誕生時）

「9月上旬」等、具体的な時期（誕生日）が記入されているものばかりが見受けられた。

③「誕生後～1歳になるまで」

「第1子の誕生後～1歳になるまで」と回答した父親のうち、自由記述に記入があったのは40名で、図5-5のような内容であった（うち、欠損値2、複数回答あり）。

エピソードでの回答は、他の時期と比べ、各回答カテゴリーごとの度数は少ないが、バリエーションに富んだものとなった。

「一緒に生活の開始時」が最も多く8名の回答があった。「母子が退院するまでの通院時」といった回答もあり、今までの夫婦の生活から、子どもを含めた生活へと変わる生活の変化は、重要な契機となっているようである。

その他、「お風呂に入れた時」「オムツを換えた時」「授乳した時」「ねかしつけをした時」「だっこした時」「子育てに参加した時」といった、具体的に子育てをすることも大きく寄与していることが見て取れる。

また、子どもの「笑顔を見た時」「反応・表情が出てきた時」「会話をした時」といった、子どもとの情緒的な通い合い・コミュニケーションや、子どもが「自分（父親）を認識した時」「パパと呼んだ時」といった、子どもによる父親の存在の認識・認知にまつわる回答が挙げられている。親→子どもといった一方向的なものではなく、子ども→親といったものを含む、双方向的な情緒的関わりあいも、父親になった実感

に寄与しているようである。これは、“親が子どもを育てる”だけでなく“子どもが親を育てている”とも言えるのかもしれない。

その他、「夜泣きをした時」のように、自分のペース・安定を揺るがされたり、「病気で入院した時」のように、子どもの存在の揺るぎなさが損なわれる不安といったネガティブなエピソードにより、改めて、自分が父親になった（自分には子どもがいる）と感じる人もいるようである。

また、子どもの成長を実感することも父親になった実感につながるのか、発達の節目の一つである「首が座った時」という回答や、「育児休暇をとった時」という社会的立場の変化のエピソードをあげている回答もあった。

特定の時期の回答としては、「1週間」（1名）、「2～3ヶ月」（1名）、「3～4ヶ月」（2名）、「6ヶ月」（1名）といった回答が見受けられた。エピソードとしては回答されていないが、各々、体験の内容としては、例えば、「一緒に生活の開始時」「笑顔を見た時」「反応・表情が出てきた時」「首が座った時」「自分を認識した時」等の、エピソードでの回答と重なるところもあるのかもしれない。

④「1歳以降」

「第1子が1歳になってから」と回答した父親のうち、自由記述に記入があったのは12名で、図5-6のような内容であった。

「誕生後～1歳になるまで」と重複するが、



図5-5 父親になったと感じた具体的な時期（誕生後～1歳になるまで）

子どもとのコミュニケーション（「会話をした時」）、子どもによる父親の存在の認識・認知（「自分を認識した時」「パパと呼んだ時」）、生活の変化（「一緒に生活の開始時」）の回答が見られた。

また、発達の節目である「離乳食になった時」「歩き初めた時」で、父親になったと感じるとした回答も見受けられた。

特定の時期の回答としては「1歳～」（1名）が存在した。

⑤「その他」

「その他」と回答した父親のうち、自由記述に記入があったのは、6名だった。

「全てじょじょに時間とともに」「子どもが少しずつしゃべるようになった頃から」のように、はっきりとした時期が特定されないが、父親になったと実感された時期があるとした回答が2名見受けられた。

(3) 父親になったと感じた時期・まとめ

以上の結果より、妊娠中は、子どもの存在を具体的に知る・感じる事、誕生時は、生まれ出でたまさにその事実や、子どもを実際に五感を通して直接的に感じる事、誕生後は、具体的に子育てをすること・父子の双方向的な情緒的関わりあい・コミュニケーション・成長を実感すること、といった体験が、「父親になった

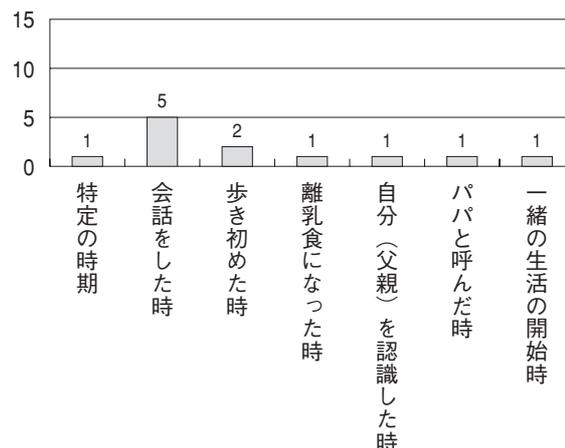


図5-6 父親になったと感じた具体的な時期（1歳以降）

と感じる」ことに主として寄与していることが見て取れた。

また、各期を通じて、子どもとの直接的な関わりによってではなく、（子を持つ親であるという）社会的な立場の変化や生活の変化といった、父親自身の日々の暮らしの枠組みの変化によって、父親になったと感じるに至っている場合もあるようである。

「産む性」である母親にとっては、妊娠・出産という生物学的なプロセスそのものが、心理的に母親になる実感を得てゆくイニシエーション（通過儀礼）となっていると思われるが、父親の場合は、これらの心理的体験の一つ一つが、イニシエーションとしての意味を担っているのではないかと考えられる。

第6章 父親の子育て参加度と諸要因との関連

第3章で取り上げた11項目について、子育て参加についての量的指標である「頻度」のみの得点を加算し、「子育て参加度」尺度とした。今回は、「その他」の回答数が少数であったこと、また、他の選択肢への統合が難しいことと便宜上の理由から「その他」の回答を除外し、4件法としてデータを取り扱うこととし、「ほとんど毎日」を4点、「週に3、4日」を3点、「週に1、2回」を2点、「ほとんどない」を1点として加算した。子育て参加度の最低値は11、最高値は40、最頻値は28、平均値は26.10点（満点44点）であった。

分析にはt検定、または一元配置の分散分析を用いて、各項目間における子育て参加度得点の平均点の差を調べることにより行った。また、一元配置の分散分析で平均値に意味のある差（有意差）があったものに関しては、多重比較（Tukey法）を行って詳細に比較した。

1. 家庭状況との関連

(1) 子ども、母親の状況と父親の子育て参加度

まず、子どもの年齢ごとの子育て参加度の平均を比べたところ（図6-1）有意な差が認められ（ $p<.001$ ）、多重比較の結果、3歳児の父親は0歳、4歳、5歳、6歳児の父親より子育てに参加していることが示された。2002年の調査では、1歳～3歳児を持つ父親が5歳～6歳児を持つ父親よりも参加度が高いことが示唆されたが、今回の調査では、3歳児の父親の参加度が他の年齢の子どもを持つ父親よりも高い結果となった。

次に、子どもが日中過ごす場所ごとの子育て参加度の平均値を比べたところ（図6-2）、有意な差が認められ（ $p<.001$ ）、幼稚園で過ごしている子どもを持つ父親は、自宅、保育園で過ごしている子どもをもつ父親よりも子育てに参加していないことが示された。また、妻が職についているかどうかについても有意な差が認められ（ $p<.001$ ）（図6-3）、職業についている

妻を持つ父親の方が職業についていない妻を持つ父親よりも子育てに参加していることが示された。これらは2002年の調査と同様の結果であった。

これらの結果より、妻が職業につき、保育所に子どもを預けている父親は子育てによく参加していることがわかる。一方、妻が職業についていない父親は子育てに参加する度合いが低く、父親は仕事、母親は育児という役割意識が明確化しやすいということが考えられるだろう。

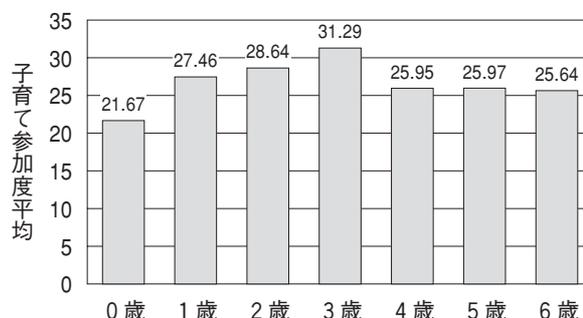


図6-1 子どもの年齢と父親の子育て参加度の関連

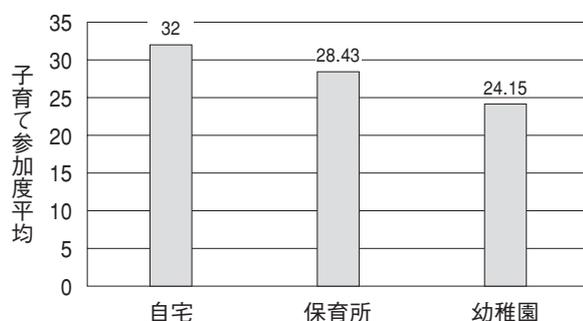


図6-2 子どもが日中過ごす場所と父親の子育て参加度の関連

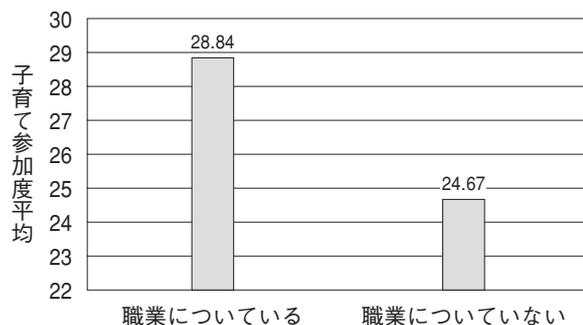


図6-3 妻の就業の有無と父親の子育て参加度の関連

一方、子どもの人数、核家族／拡大家族の別、面倒を見てもらえる人がいるかどうかと子育て参加度との関連について検討したが、父親の子育て参加度の平均に有意な差は見られなかった。このことは、子育ての手が足りているかどうかに関わりなく、父親が子育てに参加する傾向にあることを示唆していると言えるかもしれない。

(2) 父親の状況と子育て参加度

父親の状況と子育て参加度の関連を見るために、父親の年齢、職業、在宅時間に関わる項目について子育て参加度の平均を調べた。

父親の年齢ごとの子育て参加度の平均（図6-4）については、50代の有効回答数が5と非常に少なかったため、50代を除いて検定を行ったところ、有意な差は認められなかった。2002年の調査では、40代の父親の子育て参加度が他の年齢群よりも有意に低かったが、今回はその傾向は特に見られず、働き盛りで最も忙しいとされる40代の父親の子育て参加度が高まってきていることが窺える結果となった。

父親の職業については、子育て参加度の平均（図6-5）に有意な差が認められ（ $p < .05$ ）、公務員の父親の方が会社員の父親よりも子育て参加度が高いことが示された。

また、父親の在宅時間との関連について調べるため、休日の日数、帰宅時間、育児休暇の取得の有無について子育て参加度の平均の差を検討したところ、いずれも有意な差が認められた。

休日の日数については、週休3日以上父親は週休1日未満の父親より子育て参加度が高いこと、また、週休2日の父親が週休1日の父親よりも子育て参加度が高いことが示された（ $p < .01$ ）（図6-6）。

帰宅時間については、22時～0時の父親よりも16時～18時、18時～20時の父親の方が、また、帰宅時間が20時～22時の父親よりも18時～20時の父親の方が子育て参加度が高いことが示された（ $p < .001$ ）（図6-7）。

さらに、育児休暇については、育児休暇を取った父親の方が取らなかった父親よりも子育て

参加度が有意に高かった（ $p < .05$ ）（図6-8）。

これらの結果から、休日が多く、在宅時間が長い父親ほど子育てによく参加していることが

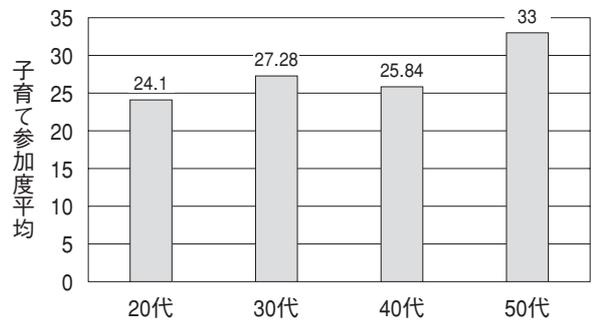


図6-4 父親の年齢と父親の子育て参加度の関連

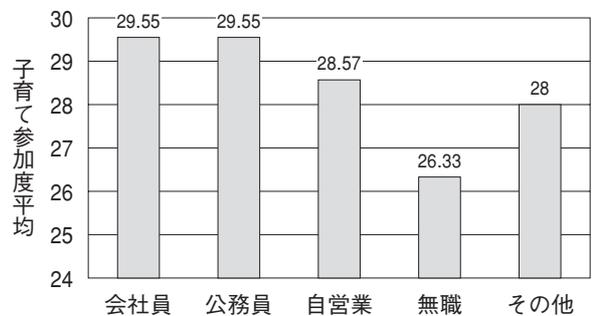


図6-5 父親の職業と父親の子育て参加度の関連

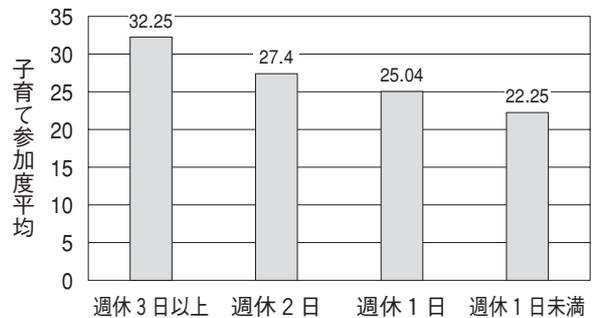


図6-6 父親の週休と父親の子育て参加度の関連

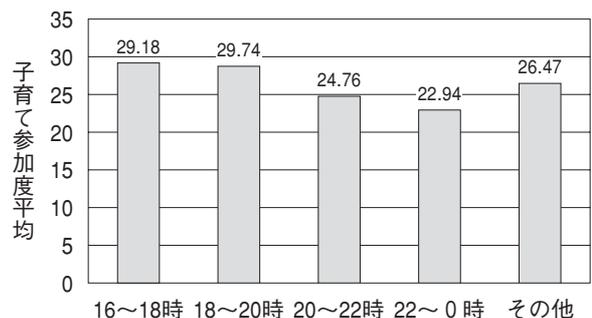


図6-7 父親の帰宅時間と父親の子育て参加度の関連

明らかとなった。また、育児休暇を取った父親のほうがとらなかった父親よりもよく子育てに参加していることも明らかとなった。

2. 妊娠・出産状況との関連

まず、妊婦健診に付き添ったかどうかによる父親の子育て参加度の平均の差(図6-9)を調べたところ、有意な差が認められた($p<.01$)。多重比較の結果、診察室まで付き添ったことがある父親の方が、健診に付き添ったことがない父親より子育て参加度が高いことが示され、2002年の調査と同じ結果が得られた。

次に、父親学級・両親学級に参加の有無による子育て参加度の平均の差(図6-10)については、その他の有効回答数が5と少なかったため、その他を除いて分析を行った。その結果、参加したことがある父親の方が参加したことがない父親より子育て参加度が有意に高い($p<.05$)ことが示され、2002年の調査と同様の結果が得られた。

一方、出産に立ち会ったかどうか、立会いを希望したかどうかで子育て参加度に有意な差はなく、2002年度と同様の結果であった。

出産後に里帰り子どもと離れた時期があったかどうかについては、2002年度の調査では、里帰り子どもと離れた時期がない父親の方が子育て参加度が有意に高かったが、今回の調査では子育て参加度に有意な差は見られなかった。

これらの結果から、妊娠中から子どもに関心を持って関わっている父親の方が、出産後よく子育てに参加する傾向にあるが、出産に立ち会うことや出産後離れた時期があるかどうかは、その後の子育て参加に影響を及ぼさないということが示された。

3. 子育てをめぐる意識との関連

(1) 子育てに対する父親の意識と子育て参加度

子育てに対する肯定的な意識を問う「毎日の子育てが楽しい」、「子育てが好きだ」、「子育ては面白い」という項目において、子育て参加度の平均にいずれも有意な差が認められた。

「子育てが楽しい」については、多重比較の結果、非常にそうと答えた人が、まあまあそう、あまりそうではないと答えた人より子育て参加度が高く、まあまあそうと答えた人はあまりそうではないと答えた人より子育て参加度が有意に高いことが示され($p<.001$) (図6-11)、「子育てが好きだ」、「子育ては面白い」については、非常にそうと答えた人が、まあまあそう、あまりそうではないと答えた人より子育て参加度が有意に高いことが示された($p<.001$) (図

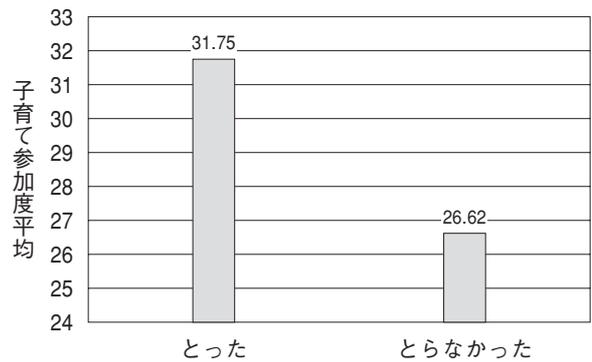


図6-8 父親の育児休暇の取得と父親の子育て参加度の関連

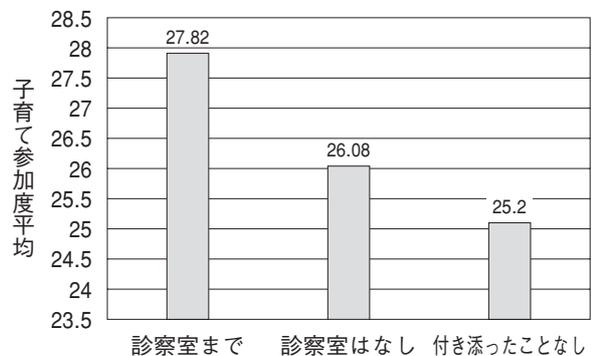


図6-9 父親の妊婦健診付き添いと父親の子育て参加度の関連

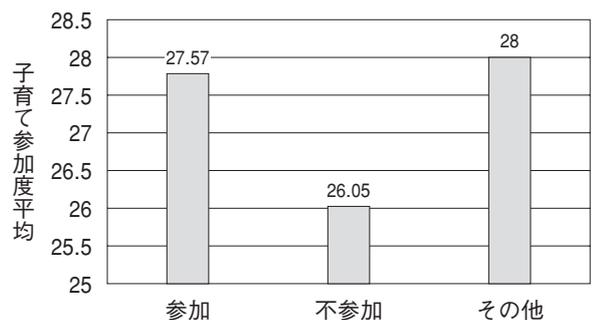


図6-10 父親・両親教室への参加と父親の子育て参加度の関連

6-12、13)。

一方、子育てに対する否定的な意識を問う「子育ては苦痛だ」、「子育てについて悩みがある」、「子育てのために、自分が犠牲になるのは仕方がない」、「よい親であろうとして無理をしている」については、子育て参加度の平均に有意な差は見られなかったが、「長時間子どもだけを相手にして過ごすのは苦痛である」については、有意な差が認められ ($p < .05$) (図 6-14)、全然そうではないと答えた人の方がまあまあそうであると答えた人よりも子育て参加度が高いことが示された。

これらの結果から、父親が子育てに対する否定的な意識を持っているかどうかは、子育てに参加している頻度には関係がないが、子育てに肯定的な意識を持っている父親は子育てによく参加しているということが示唆された。また、子育てによく参加している父親のほうが長時間子どもの相手をする機会が多いと考えられるにもかかわらず、あまり参加していない父親よりも子どもの世話を苦痛を感じない傾向にあることが示唆された。

このことから、子育て参加の多少にかかわらず、父親達は子育てに対してある程度の苦痛や悩みを感じており、子育てにたまにしか参加しないからその楽しさだけを楽しむというものではないことが窺える。それとは反対に、子育てによく参加するほど子育ての楽しさや面白さを享受でき、子どもの世話をすることに対する負担感は軽減するのではないかと考えることができるだろう。ただ、「毎日の子育てが楽しい」「子育ては面白い」に全然そうではないと答えた父親の子育て参加度が比較的高い (図 6-11、13) ことから、日常的に子育てに参加しているからこそ手放しに「楽しい」「面白い」とは言いづらい父親達がいることにも留意する必要があると考えられる。

(2) 父親の役割意識と子育て参加度

父親の子育てに関する役割意識のあり方と子育て参加度の関係について検討するため、「子

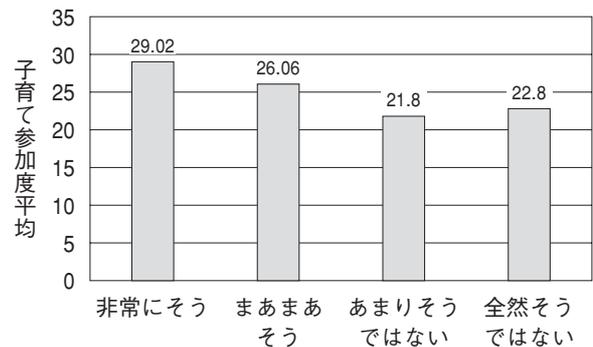


図 6-11 「毎日の子育てが楽しい」への回答と父親の子育て参加度の関連

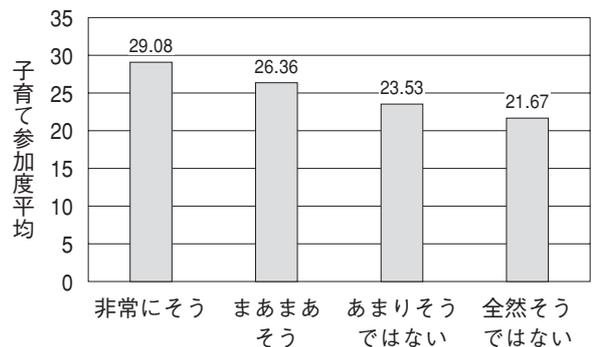


図 6-12 「子育てが好きだ」への回答と父親の子育て参加度の関連

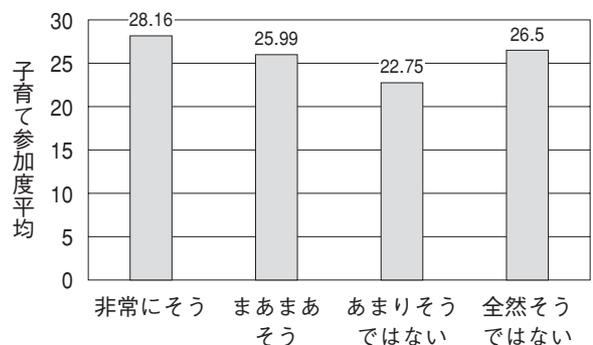


図 6-13 「子育ては面白い」への回答と父親の子育て参加度の関連

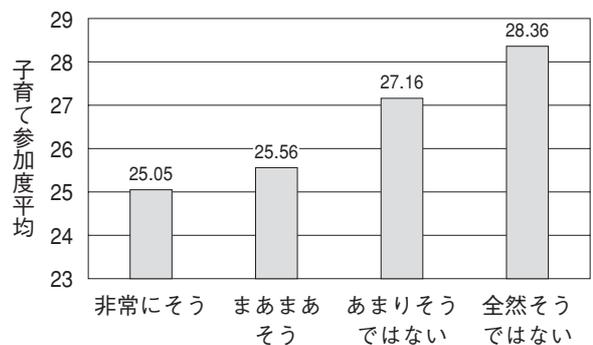


図 6-14 「長時間子どもだけを相手にして過ごすのは苦痛である」への回答と父親の子育て参加度の関連

育てる上で、父親と母親の役割に差はないと思う」、「経済的な必要がなければ、子どもが小さい間、母親は仕事をせずに家にいた方がいい」、「仕事の事情が許せば、子どもが小さい間、父親は仕事を減らして在宅時間を長くした方がいい」、「子どもがある程度大きくなってからが父親の出番だ」という項目について子育て参加度の平均の差を調べたところ、すべての項目に有意な差が認められた。

まず、「子育てする上で、父親と母親の役割に差はないと思う」については、多重分析の結果、全然そうではないと回答した人は、他の選択肢を選んだ人よりも子育て参加度が有意に低いことが示され ($p < .01$) (図 6-15)、それとは反対に「経済的な必要がなければ、子どもが小さい間、母親は仕事をせずに家にいた方がいい」では、全然そうではないと回答した人が、他の選択肢を選んだ人よりも子育て参加度が有意に高いことが示された ($p < .01$) (図 6-16)。

また、「仕事の事情が許せば、子どもが小さい間、父親は仕事を減らして在宅時間を長くした方がいい」では、非常にそう、まあまあそうと回答した人の方が、あまりそう思わないと回答した人よりも子育て参加度が有意に高いことが示され ($p < .01$) (図 6-17)、それとは反対に、「子どもがある程度大きくなってからが父親の出番だ」では、全然そうではないと答えた人の方が、まあまあそう思うと答えた人よりも子育て参加度が有意に高いことが示された ($p < .01$) (図 6-18)。

これらの結果から、父親と母親の役割に明確に差があると考え、特に小さい時は母親が育児の中心であると考えている父親は、子育てにあまり参加しない傾向にあり、そのような役割意識に縛られない父親のほうが子育てによく参加する傾向にあると考えられる。

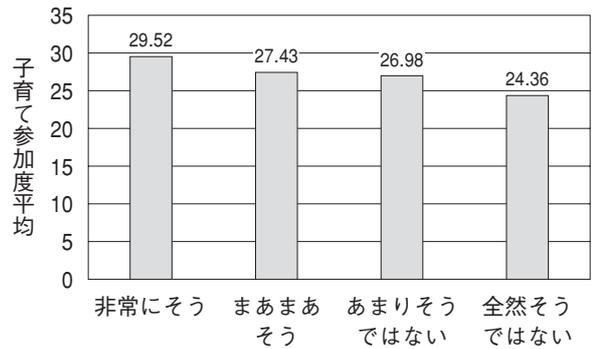


図 6-15 「子育てする上で父親と母親の役割に差はないと思う」への回答と父親の子育て参加度の関連

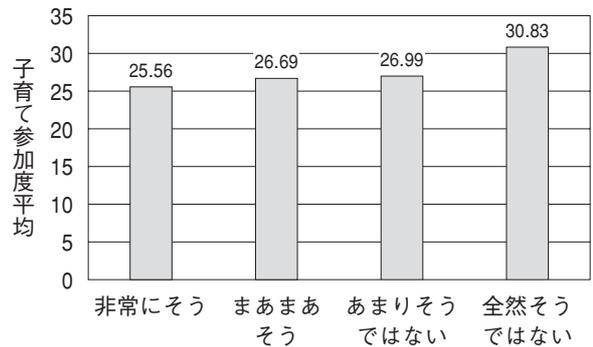


図 6-16 「子どもが小さい間、母親は仕事をせずに家にいた方がいい」への回答と父親の子育て参加度の関連

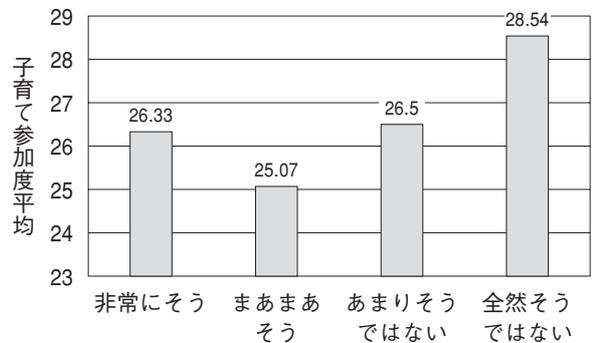


図 6-17 「子どもが小さい間、父親は在宅時間を長くした方がいい」への回答と父親の子育て参加度の関連

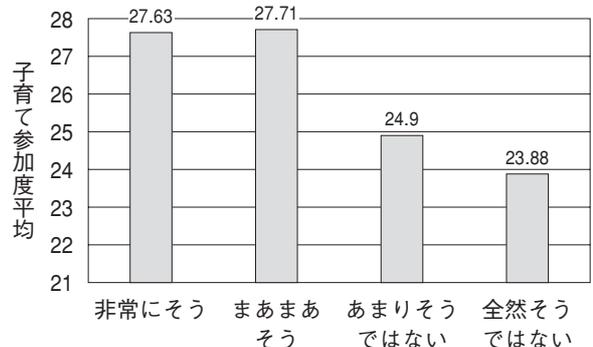


図 6-18 「子どもがある程度大きくなってからが父親の出番だ」への回答と父親の子育て参加度の関連

第7章 父親の家族に対する意識 —文章完成法の分析—

1. はじめに

現代の父親は、自らの家族についてどのようなイメージを抱いているのかを明らかにするため、文章完成法（以下、SCT）を用いて質問を作成した。

質問項目は、以下の7つである。

私にとって子どもは _____

子どもにとって私は _____

私にとって妻は _____

妻にとって私は _____

私にとって家族は _____

家族にとって私は _____

子育ては _____

本章では、SCT についての分析を行う。

2. 形式的分析

今回の調査協力者のうち、父親（継父による回答はなし）は、330名であった。このうちSCTに無記入であった人数が、質問項目によって若干の差がみられた。結果は、以下の表（表7-1）の通りである。

表7-1 質問項目別 無記入数・無記入率・分析対象

質問	無記入数	無記入率 (%)	分析対象
私にとって子どもは	46	13.9	284
子どもにとって私は	57	17.3	273
私にとって妻は	53	16.1	277
妻にとって私は	62	18.8	268
私にとって家族は	54	16.4	276
家族にとって私は	70	21.2	260
子育ては	59	17.9	271

SCTの位置は、質問紙のなかで全12ページ中の11ページ目という終盤部分にある。そのため、協力者の集中力の途切れや、中だるみが生じている可能性がある。さらに、前半の多くの質問とは異なり、すべて自由記述式である。このため、他の質問に比べると協力者への負担も大きいと考えてよい。しかし、そうであればSCTへの無記入数の発生は、一律であるか、

もしくは後半ほど高くなると予想される。

ところが、結果は表7-1の通り、質問項目により無記入数の増減がみられる。

さらにその内容を詳しく見ると、無記入数が高くなるのは、「私にとって」ではじまる質問項目ではなく、「子どもにとって」「妻にとって」「家族にとって」ではじまる質問項目である。家族の成員から自分がどのように見られているのか、家族にとって自分の役割や存在意義は何であるのかを問われることは、協力者にとって負荷のかかる質問であったと考えられる。

なかでも「家族にとって私は」の無記入数が、一番多くなっているのは、質問項目が3つのなかで最後にきているからという推測も可能である。しかし、穿った見方をすると、父と子、夫と妻、という二者関係のなかでの自分の位置づけはしやすいが、父、母、子の三者関係のなかでの役割や存在意義となると、見出しにくいものなのかもしれない。

いずれにせよ、家族の成員からみた自らのイメージについて問われると回答が滞ることは、注目すべき点として指摘しておきたい。

3. 内容分析

本節では、質問項目ごとに回答内容の分析を行う。まず、回答内容の分析方法を説明する。

(1) 回答の分析方法

基本的に、回答の文章を内容に応じて、カテゴリーに分類する方法をとった。

複数のカテゴリーに当てはまる回答については、どこか1つのカテゴリーに当てはまるように判断をしたり、1つの回答を複数のカテゴリーに分類する際に、重みづけをしたりすることはしなかった。いわば、回答を「複数回答あり」の方式で扱うことにした。

以上の手続きで、カテゴリーの中に集められた数を「言及数」と名づけた。有効回答数330から、無記入のものを除いたものを「分析対象」

と呼ぶことにした。「分析対象」を分母として、どのくらいの割合で「言及数」があるのかを「言及率」で示した。

このような方法をとったのは、質問項目に対して、父親の中にどのような意識が生まれてくるのかを、なるべく幅広く拾い上げようとしたためである。

以下、各質問項目について分析をしてゆく。

まず、各カテゴリーについて、分類のルールを示しながら実際の記入例を挙げる。末尾に簡単な考察を加える。(ゴジック体のものがカテゴリー名、「」内は実際の回答例である)

(2) 私にとって子どもは (表7-2)

宝…文字通り「宝」「宝物」と記入されたもの。大切な・かけがえのない…「大切な」「大事な」

「かけがえのない」などと記入されたもの。

分身・体の一部…「自分の分身」「体の一部である」「可愛いコピー」など。

守るべき…「守るべきもの」「何より大事、守るべき存在」などとしたもの。

生きがい…文字通りそのように記入されたもの。一番の…「唯一無二」「何よりも」なども含めた形容詞。

鏡…「自分を映す鏡」「自分の鏡」などの回答。その他…いずれのカテゴリーにも当てはまらなかったもの。これは、他の質問項目への回答でも同様である。

表7-2 私にとって子どもは

カテゴリー	言及数	言及率 (%)
宝	130	45.8
大切な・かけがえのない	66	23.2
分身・体の一部	15	5.3
守るべき	14	4.9
生きがい	12	4.2
一番の	11	3.9
鏡	9	3.2
その他	100	35.2
合計	357	

宝、大切な・かけがえのないがこの質問への回答の多くを占めている。生きがい、一番のも

含めて、父親が自分の子どもをいかに大切に思っているかがわかる。

分身・体の一部からは、子どものことをわがことのように感じているとも考えられる。もしかすると、自分のようにあってほしいという期待が込められているのかもしれない。

守るべきは、子どもは自ら守るべきものがあるという、父親の自覚のようなものが垣間見える。

鏡からは、子どもの存在を通じて、自分についての発見があることをうかがわせる。

以上から、父親が自分の子どもに対して、宝のように非常に大切に思っていることがわかる。しかし、その大切な子どもとのかかわりあいについては、あまり触れられていないという印象も受ける。

(3) 子どもにとって私は (表7-3)

父…「父」「父親」「父親である」という続柄をそのまま記したような回答と、「パパである」「お父さん」「『トオチャン』です」など子どもからそのように呼ばれていると推測される回答の両方を含んでいる。

遊び相手…「遊び相手」の他、「身体を使って遊ぶ相手である」「今は恰好の怪獣役」も含まれた。

頼りになる…「頼りになる存在」「頼りとする存在である」など。

～でありたい…「常にたよりになるそんざいでいたい」「怖くても 優しい父親でありたい」など、希望の表現がなされているもの。また「いざとなったらたよれる相手 (希望)」のようなものも含む。

手本・教育者…「お手本」「保護者であり教育者」「道標」「大人の見本」など、教え導くもの、また人とはどのようなものであるのかを示すような回答。

必要な・なくてはならない…「必要不可欠」「なくてはならない存在」など。

親・保護者…「親」「保護者である」など、親・保護者の語を含む回答。「父親」は父のカテゴリーに入れた。

怖い…「恐い存在」「怒るとコワイ友達」のように、「こわい」という形容詞を含むもの。

友だち・友だちのような…「友達だ」「友達のよう」に仲のいい関係」など、「友だち」という語を含むもの。

その他は、前の質問項目と同じ。

表7-3 子どもにとって私は

カテゴリー	言及数	言及率 (%)
父	85	31.1
遊び相手	31	11.4
頼りになる	23	8.8
～でありたい	20	7.3
手本・教育者	16	5.9
必要な・なくてはならない	15	5.5
親・保護者	15	5.5
怖い	13	4.8
友だち・友だちのような	12	4.4
その他	158	57.9
合計	388	

一番多い父については、先述の通り、続柄をそのまま記したものと、実際に子どもからそう呼ばれていると思われるものの二種類が含まれる。前者は同義反復的で、子どもにとって自分が何であるのかについて思考が滞ってしまっているように感じられる。後者は、子どもが呼称に託した思いをそのまま受け止めようとする姿勢、その子とその父親との間でしか成立しえない関係の存在をうかがわせる。

親・保護者も同義反復的な印象を受けることは否めない。

遊び相手、頼りになる、怖いからは、普段の父子関係が垣間見えるようである。

～でありたいという希望の表現は、父親であることの決意表明とも受け取れる。

遊び相手、手本・教育者、友だち・友だちのようなは、父親の役割を具体的に記したものである。友だち、遊び相手という横並び・水平の関係を取ると同時に、手本・教育者という上下・垂直の関係もとる必要があるという点は、現在において父親であることの困難の一因であるのではなかろうか。

必要な・なくてはならないからは、父親とい

うものを欠くことのできない重要なものという位置づけをしていることがうかがえる。

怖いが一定数みられたことは、一時代前のカミナリおやじを思い起こさせる。しかし、実際の記入例をみると「怒るとコワイ友達」「適当に怖い遊び相手」などがあり、水平の関係、垂直の関係を同時に実現するために必要な方便なのかもしれない。

(4) 私にとって妻は (表7-4)

パートナー…「パートナー」との表記がほとんどであるが、「同志」「相棒」「伴侶」「運命共同体」も含めた。

家族・続柄…「家族」と記入されたもの、「子の母親」「妻」「配偶者」「よめ」「お母さん」など、家族関係を表す語。

愛する人・恋人…「愛する人」「最愛の人」「恋人」など。

理解者…「理解者」「理解のある女性です」など、妻が理解のある存在であることを記したもの。

感謝・賛辞…「感謝すべき対象だ」「すばらしいパートナー」など、妻への感謝の言葉や賛辞が記されたもの。

友…「いちばんの親友」「母みたいな友達」「戦友」など、「友」の語を含むもの。

大切な・かけがえのない、必要な・なくてはならない、一番の、宝、その他は、前の質問項目と同様。

表7-4 私にとって妻は

カテゴリー	言及数	言及率 (%)
パートナー	85	30.1
大切な・かけがえのない	62	22.4
家族・続柄	23	8.3
愛する人・恋人	18	6.5
必要な・なくてはならない	14	5.1
一番の	13	4.7
宝	12	4.3
理解者	12	4.3
感謝・賛辞	11	4.0
友	10	3.6
その他	88	31.8
合計	348	

一番多いものはパートナーであった。パートナーという言葉は、仲間、同伴者、相棒、配偶者、分かち合う人、友だち、組合員、社員などと、意味するところは幅広い。妻をそのような幅広さを含んだものと認識しているのか、それとも、明確な判断を避けたのか、解釈の分かれるところであろう。

大切な・かけがえのない、必要な・なくてはならない、一番の、宝など、子ども同様、大切なものであることをうかがわせるものが続く。さらに感謝・賛辞が述べられる。

妻との関係を具体的に探ろうとすると、まず家族・続柄が上位にくる。質問項目「子どもにとって私は」同様、同義反復的な印象を受ける。しかし、愛する人・恋人、友、理解者となると、夫婦関係のあり方が少し見えるような気がする。

以上、妻に対しては「パートナー」とややほかしたような表現が多いながらも、おおむね肯定的（やや過剰に感謝の気持ちを述べているものもあるが）にとらえていると考えられそうである。

(5) 妻にとって私は (表7-5)

夫・子の父…続柄を記したもの。

わからない…「わからない」「？」などと記されたもの。

やっかいな・大きな子ども…「足をひっぱる存在」「じゃま?」「大きな子供」「やっかいな子どもであるかもしれない」など、妻を困らせる存在であると述べたもの。

支え…「心の支え」「支えてくれる人」「縁の下の力持ち」など、支える存在であることを示すもの。

良い…「良いお父ちゃん?」「良きパートナー」など、「良い」「良き」という形容詞。

大黒柱・中心的存在…「一家の大黒柱である」「主」「監督」など、「大黒柱」という言葉が記されたもの、家族にとって中心的存在であると記されたもの。

パートナー、頼りになる、大切な・かけがえのない、～でありたい、必要な・なくてはなら

ない、その他は、前の質問項目と同様。

表7-5 妻にとって私は

カテゴリー	言及数	言及率 (%)
パートナー	62	23.1
夫・子の父	23	8.6
わからない	21	7.8
やっかいな・大きな子ども	21	7.8
頼りになる	19	7.1
大切な・かけがえのない	19	7.1
支え	13	4.9
～でありたい	13	4.9
必要な・なくてはならない	12	4.5
良い	10	3.7
大黒柱・中心的存在	10	3.7
その他	110	41.0
合計	333	

パートナー、夫・子の父と、内実が曖昧な表現、同義反復的な回答が上位を占める。さらにわからないと明言したものも一定数みられる。

このような自己評価の下にくさは、やっかいな・大きな子ども、頼りになる、大切な・かけがえのないが拮抗しているあたりにその答えがあるのかもしれない。子育て中の夫婦にとって、夫とは、「足をひっぱる存在」にも「頼れる存在」にもなりえる振り幅の大きなものであるのだろう。

支え、大黒柱・中心的存在と自らが一家を背負っている自負がうかがえるものもみられた。

父子関係同様、子育て中の夫婦関係にも、パートナーという水平の関係と「主」「監督」といった垂直の関係が入り混じっており、父親の難しさの一端が垣間見られる。

(6) 私にとって家族は (表7-6)

いやし・やすらぎ…「やすらぎ」「いやしと誇り」など、やすらぎをもたらすものであるという表現のあるもの。

帰るところ・居場所…「帰る場所」「自分の居場所である」など。

活力源…「活力の源」「元気の源」「安心と勇気、元気をくれる」など、活力などを備給する場

としたもの。

大切な・かけがえのない、宝、守るべき、一番の、必要な・なくてはならない、その他、以上は、前の質問項目と同様。

表7-6 私にとって家族は

カテゴリー	言及数	言及率 (%)
大切な・かけがえのない	87	31.5
宝	37	13.4
守るべき	30	10.9
いやし・やすらぎ	29	10.5
一番の	23	8.3
帰るところ・居場所	19	6.9
活力源	15	5.4
必要な・なくてはならない	14	5.1
その他	101	36.6
合計	355	

子ども、妻同様、家族も非常に大切であることがうかがえる。そんな家族を自らが守るべきものと考えている点は、非常に頼もしいといえるだろう。

一方で、家族が父親にとって活力源、帰るところ・居場所であるというのは、現代の家族の機能がどのようなものであるかを示唆するようでもある。

(7) 家族にとって私は (表7-7)

大黒柱…「大黒柱」との文言が記入されたもの。

～の一員…「一員」「一部」「家族の一員」「大切なメンバーの一人である」など、「～の一員」と記されたもの。

リーダー・中心的存在…「リーダー」「キャプテン」「社長」「船頭」など、リーダー、中心的存在であると記されたもの。

経済的機能…「おサイフ」「稼ぎ頭です」「生計の源」など、経済的な機能を担っていることに言及したもの。

柱…「柱」「はしらでありたい」「大きな柱」など、「大黒柱」以外で「柱」の表現のあったもの。

必要な・なくてはならない、わからない、続柄、大切な・かけがえのない、～でありたい、

頼りになる、その他は、前と同様。

表7-7 家族にとって私は

カテゴリー	言及数	言及率 (%)
必要な・なくてはならない	31	11.9
大黒柱	30	11.5
わからない	28	10.8
続柄	26	10.0
大切な・かけがえのない	22	8.5
～の一員	21	8.1
リーダー・中心的存在	21	8.1
～でありたい	19	7.3
頼りになる	18	6.9
経済的機能	15	5.8
柱	11	4.2
その他	90	34.6
合計	332	

必要な・なくてはならないが他の質問項目に比べて一番多くなっている。一方で、わからない、続柄も上位に挙げられている。混乱した様相である。

他に目を引くのは、大黒柱、経済的機能が挙げられている点だろう。父親の役割の代表的なものは稼ぎを得ることと考えられていることの表れであろうか。

しかし、～の一員とリーダー・中心的存在が拮抗しているのも興味深い。ここにも水平の関係と垂直の関係の混在がみられる。

(8) 子育ては (表7-8)

楽しい…「楽しい」という文言のあったもの。

～だが (逆接)…「大変ではあるが、それ以上に感動が多い」のように逆接の接続詞が用いられているもの。

大変…「大変」という文言のあるもの。

親育て…「自分を成長させてくれる体験」「自分を育てる」「親育ち」など、親を育てるという記述のあるもの。

修行・勉強・試練…「勉強である」「人生の修行」「親となるためのしれん」など、自らを鍛えるような内容のもの。

やりがいのある・素晴らしい…「すばらしいも

の]「やりがいがあり、たのしいこと」「いいもんだ」など、肯定的な内容を記したもの。
 苦しい・しんどい…「しんどい」「いいことない、苦しいだけ」など、辛い・苦しいなどの感想が述べられたもの。

共に育つ…「お互い成長すること」「子供と一緒に成長すること」など、親子共に成長することに言及したもの。

難しい…「難しい」という文言のあるもの。

面白い…「面白い」という文言のあるもの。

仕事・義務・使命…「仕事」「義務」「使命」「任務」「ライフワーク」などの文言のあるもの。

その他…前の質問項目と同様。

表 7-8 子育ては

カテゴリー	言及数	言及率 (%)
楽しい	83	30.1
～だが (逆接)	27	10.0
大変	22	8.1
親育て	21	7.7
修行・勉強・試練	19	7.0
やりがいのある・素晴らしい	18	6.6
苦しい・しんどい	16	5.9
共に育つ	16	5.9
難しい	14	5.2
面白い	13	4.8
仕事・義務・使命	11	4.1
その他	112	41.3
合計	372	

楽しい、やりがいのある・素晴らしい、面白いといったいわゆるポジティブな評価と、大変、修行・勉強・試練、苦しい・しんどい、難しいなどいわゆるネガティブな評価が混在している。両者を～だが (逆接) で結んだものも多い。しばしば言われる通り、父親にとっても、子育ては苦しいことも喜びも、両方伴ったものであるといえるだろう。

親育て、共に育つ、仕事・義務・使命という位置づけのもと、楽しさと苦しさを日々味わっているということであろうか。

4. まとめ

以上、SCT の分析を通じて、父親の家族に対するイメージを概観した。

全般的に、家族とその成員を宝のように大切に思っていることが強くうかがわれた。

しかし、具体的に父親がどのような役割を担っているかという点については、抽象的であり、曖昧な点が残る。場合によっては、相反するような役割が述べられ、父親のなかで混乱があることが示唆された。

このような混乱を生じさせている要因の一つは、「友だちのような」水平の関係と、「リーダー」となり他の成員を引っ張っていく垂直の関係の両方を担おうとしている点にあるのではないかと推測される。

第8章 父親が考える父親への育児支援

「乳幼児をもつ父親のために、何らかの育児支援が必要だと思いますか」に対する答えは、必要だと思う178人（全体の53.9%）、必要ないと思う43人（全体の13.0%）、わからない84人（全体の25.5%）であった。この結果から、回答者（父親）の約半数は何らかの育児支援が必要だと思っていることが分かった（表8-1、図8-1）。

次に、何らかの育児支援が必要だと回答している178人に、「どのような育児支援が必要だと思いますか」と質問をしたところ、159人（89%）の人が回答している。その中で、複数回答をしている人が43人（27%）おり、全回答は243であった（表8-2）。

父親たちが一番求めている育児支援は(1)育児休暇関連（161/243）であった。その内訳は、「育児休暇が必要36/243」、「育児休暇以外の休みが欲しい29/243」、「子どもと過ごす時間をもっと持ちたい19/243」であり、父親は子どもと過ごすための休暇や時間を持つための支援を必要としている。

父親たちは育児休暇が必要だと考えているが、実際には、第一章の基礎統計の結果から、父親の約9割以上が育児休業制度を利用していないことがわかった。利用しなかった理由としては、「利用しなかったが、制度がなかった」10.4%、「制度はあり、利用しなかったが、利用出来なかった」12.7%、「制度がなく、利用しようと思わなかった」19.6%、「制度はあったが、利用しようと思わなかった」36.4%と答えている。

育児休暇や、子どもとの時間を持ちたい思いを持っていても、現状においては実行することはかなり困難であることがわかる。実際に父親が育児休暇や子どもとの時間を持つためには、父親が子育てをすることに對する社会の理解や認識が必要であり、そのためには、育児休暇を制度化、義務化すること、また、実際に育児休暇を制度として持っていない会社に対しては、罰則を与えなくてはならないというような回答

表8-1 父親への育児支援は必要だと思うか

カテゴリー	度数
必要有	178
必要無	43
わからない	84
欠損	25
合計	330

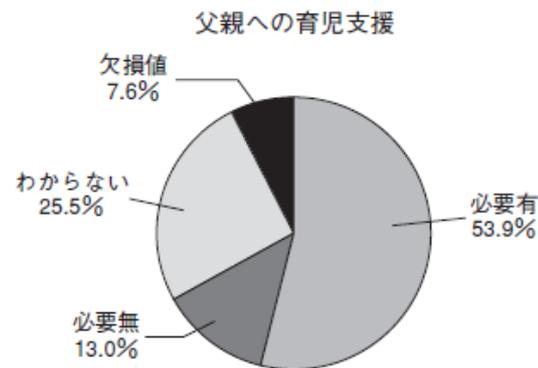


図8-1 父親への育児支援は必要だと思うか

表8-2 父親が必要とする育児支援

カテゴリー	度数
(1) 育児休暇関連	161
育児休暇	(36)
時短等の導入	(32)
育児休暇以外の休み	(29)
子どもと過ごす時間の確保	(19)
社会の理解	(12)
育児環境の整備	(9)
育児休暇の制度化	(9)
社会の認識	(5)
育児休暇取得の義務	(4)
育児休暇の強制取得	(4)
育児休暇に関する罰則の導入	(2)
(2) 経済的支援	33
(3) 全般的支援	13
(4) 父親教育	9
(5) その他	27
合計	243

も見られた。

<具体例>

- ・企業に対して父親の育児支援を義務化しないと、制度はあっても、サポートもなかったりと有名無実化していると全く意味がないため、国が義務化すべき
- ・会社からの理解。残業軽減、早く帰宅できるような仕組み作り。
- ・育児が社会的に非常に大切であると認められる社会であること
- ・社会として「父親も育児が当たり前」という環境が必要
- ・育児休暇を取らないと罰せられる制度を作る
- ・強制取得

次に父親たちは、(2)経済的な支援が必要だと述べている。育児休暇や子どもとの時間を取りたい思いを持っているが、生活を支えるためには、それに伴う休業補償がなければ、育児休業制度があっても育児休暇を取ることは難しく、また、様々な手当で、例えば、乳幼児医療制度、保育園、幼稚園入園に関する補助、会社よりの育児手当等も必要と考えている。

<具体例>

- ・誰しも親になると子供のために精一杯稼ぎたいと思うと思います。しかし、その結果、子どもとふれあう時間が減るわけですから、所得に応じた形での育児手当は必要かと。
- ・子供の病児休暇が欲しいです。でも、経済的に苦しくなるので、休んでばかりもいられないのが父親です。ふよう手当を充実させてほしい!!
- ・各家庭の状況は多種多様であり一概には言えない。間違いなく言えるのは仕事が増え、収入が増えると言うことが一番の助けであると言う事だ。支援とはその上に成り立つもので

ある

- ・景気が悪く、収入があまり上がらない人や、減ってしまった人が多いので、金銭的な支援や政策が必要です。なんだかんだいっても、生活を守らなければいけないので

また、(4)父親としての教育が必要であるとの回答が9あった。母親たちが妊娠が分かった後、母親教室に通うように、父親になるためには、父親教室のようなものに参加したり、学ぶことが必要であると思っている父親もいるということである。

<具体例>

- ・父親の意識改革、子どもが出来る前に父親になれるか教習所でも作ればどうでしょう。
- ・文化として、父親が育児に参加すること
- ・母親は子どもにとって初めから母親だが、父親は父親になる努力をしなければ……
- ・父親教室の実施
- ・父親としてどうすべきかとの講習があればすこしでも児童虐待が減るのではないかと思います。

父親たちは育児支援として、育児休暇だけではなく、子どもの看病のための休暇や短時間労働を望んでいるが、現実に制度を利用することはかなり困難な状況にあると述べている。2010年に、父親の育児休暇取得率の増加を意図した法律改正が実施されたが、父親たちが有効に制度を利用するためには、父親たちが育児を母親とともにすることを社会が認める環境が出来ることや、育児休業中の経済的不安が解消されることも大きな要素であろう。また、父親の抱える様々な悩みや不安などを支えるサポートや父親たちが集えるサークルも求められている。

おわりに

〔第2回〕父親調査の結果（2011）から、就学前の子どもと暮らすお父さんの90%以上は「子育ては楽しい」「子どもの成長している姿を見るのが嬉しい」と感じていることがわかりました（15頁）。また、この10年間で、妊婦健診に同行し、胎児の時から心音や映像を通してわが子に出会っているお父さんが確実に増えていることも確認されました（7頁）。

このように調査結果の一部を紹介すると、「子育てに積極的で、子どもとの暮らしに喜びを感じている」現代の父親像が浮かびあがります。しかし、父親自身に子育て意識を問う調査研究は、スタートしたばかりです。私たちの研究会でも、〔第2回〕調査の準備当初は父親意識の全体的傾向に関心を寄せていましたが、調査結果を詳細に検討する過程で、父親の子育て意識に関する包括的結論を急がず、現時点では「父親意識を理解する基本要素」を抽出し、それを多くの方々と共に共有する言葉にして提示することを重視するに至りました。

最近では「イクメン」という流行語が生まれるほど男性の子育てが社会的に注目され、父親となった男性たちが子育てについて感じること・考えることを、少しずつとは言え自分の言葉で意識する時代です。しかし、父親による子育て意識の言語化作業は、より多くの子どもの誕生を期待する日本社会の期待にさらされています。だからこそ、子育てについて研究する側は、質問紙調査から現代父親像を安易に作り上げ、父親たちの子育て意識の育ちを阻むことがないように、その形成過程に同行する姿勢をとりたいたいと思います。

さて、今回の父親調査の大きな特徴は、具体的な子育て行為への「参加頻度」に加えて「それに関する気持ち」を尋ねていることです。

たとえば、「一緒に夕食をとる」「一緒にお風呂に入る」「一緒に遊ぶ」といった比較的短時間で行える世話について、前回調査（2002年）と比べると、最多頻度は週1、2回で変わりませんが、子どもに自分からすすんでしている父親は明らかに増加しました。その一方、同じ日常の世話でも「寝かしつける」となると、父親の参加頻度は前述した3つより低くなりますが、「寝かしつけ」への意欲自体が低いわけではありません。

このように子どもの世話ひとつを取り上げてみても、父親の子育て意識は単純化した説明に馴染まず、何らかの変動性を想定した理解を組み立てる必要があるのかもしれないと考えさせられます。

また、「父親にしかできないこと」や「父親になったと感じた時期」についての結果は、非常に興味深いものです。多くの父親は「子育てに不可欠で、母親とは違う役割がある」と感じながら、理想的な父親像を示す共通表現には至っていません（23頁～26頁）。他方で、「父親としての実感」については、父親の80%以上が第1子誕生直後から1歳までの期間に経験し（28頁）、「一緒に遊ぶ」「散歩」「会話」といった父子のやりとり（18～19頁）を通して深化するようです。

「父親としての実感」と「理想的な父親（イメージ）」は、父親の子育て意識を構成する重要な要素です。両者はこれから、お父さんたちの心の中でどのように絡み合い、「実感にもとづく父親像」として結実するのでしょうか。

父親・母親をはじめ、子どもにとって身近な養育者の子育てにおける実感を尊重する姿勢は、子育て支援の要です。私たちも、「お父さんとお母さんの実感をどのように子育てに生かしていくか」について、多くの方々と共に共有していきたいと考えています。

最後になりましたが、この調査にご協力くださった皆様に心より御礼申し上げます。

〔第3期子育て研究会〕メンバー

山王教育研究所（前甲南大学文学部准教授） 穂 莉 千 恵

乳幼児をお持ちのお父さま及びご家族の方へ

子育て環境と子どもに対する意識調査（父親版）

アンケートご記入へのお願い

整理番号	点検者
3	

* このような調査です

このアンケートは、甲南大学人間科学研究所が文部科学省から「私立大学戦略的基盤形成支援事業」の助成を受けて展開している研究プロジェクト「育てる関係の危機と子育ての意識の多相性についての研究」の一環として実施するものです。

これまでに、阪神間およびその周辺で母親、父親などに対する調査を行ってきました。父親の第1回調査から9年が経過しましたが、現在も子どもを取り巻く状況は刻々と変化しています。そこで、再び同じ地域で6歳までの乳幼児（未就学児）を子育て中の父親を対象に、第2回調査を実施することになりました。

お父様にお答えいただけない場合には、ご家族の方がお答えいただいても結構です。お忙しい中とは存じますが、どうかよろしくご協力くださいますようお願いいたします。

* ご記入について

1. 原則として無記名です。
2. あてはまる番号を○で囲み、回答欄の（ ）には具体的な数字や言葉をご記入ください。
3. このアンケートは、0～6歳（就学前）のお子様がいらっしゃる方を対象としています。質問によって答えにくいものもありますが、あまり深く考え込まずにお答えください。
4. 特に指示がない限り、このアンケートは、必ず就学前のお子様一人についてお答えください。
5. 質問によっては、答える方を限定しているものもあります。指示にしたがってお答えください。

* アンケートのご返送は6月4日(必着)までお願いいたします

* 研究以外の目的には使用しません

お書きいただいた内容は、すべて統計的に処理し、研究以外の目的に使用することはありませんし、お子様やご家族にご迷惑がかかることは一切ありません。どうぞありのままをお答えください。

調査実施者 甲南大学人間科学研究所 育てる関係プロジェクト 代表：高石麻子（文学部教授）
 問い合わせ先 〒658-8501 神戸市東灘区御本8-9-1
 Tel./Fax 078-435-2683
 E-mail khs@center.konan-u.ac.jp

今回お答えいただくお子様についておたずねします

- 問1 お子様の性別 1. 男 2. 女
- 問2 お子様の年齢 1. 0歳（ ）ヶ月 2. 1歳 3. 2歳 4. 3歳
 5. 4歳 6. 5歳 7. 6歳
- 問3 お子様の出生順位 現在育てておられるお子様（ ）人のうち上から（ ）番目
- 問4 お子様の日中、おもに過ごされている場所を次の中から1つ選んで○をつけてください
 1. 自宅 2. 保育所（園） 3. 幼稚園 4. その他（ ）

あなたとご家族についておたずねします

- 問5 あなた（このアンケートにご記入くださっている方）の年齢（ ）歳
- 問6 お子様との続柄についてあてはまる番号に○をつけてください
 1. 実父 2. 継父 3. その他（ ）
- 問7 あなたと生計を一にするご家族のすべてに○をつけ、（ ）内に人数を記入してください
 お子様からみた続柄でお答えください
 1. 父親 2. 母親 3. 父方祖父 4. 父方祖母
 5. 母方祖父 6. 母方祖母 7. 兄（ ）人 8. 姉（ ）人
 9. 弟（ ）人 10. 妹（ ）人
 11. その他（ ）
 ※ お子様からみた続柄で具体的ににお答えください。
- 問8 問7以外で、子どもの面倒をみてもらうことのできる親族や友人・知人がいれば、すべてに○をつけてください
 1. 父方祖父 2. 父方祖母 3. 母方祖父 4. 母方祖母 5. 友人・知人
 6. その他（ ）
 ※ お子様からみた続柄で具体的ににお答えください。
 7. そのような人はいない

- 問9 現在のあなたの職業（職種）についてあてはまる番号に○をつけてください
 1. 会社員 2. 公務員 3. 自営業（営業の手伝いを含む）
 4. 職業についていない 5. その他（ ）
- 問10 現在のあなたの休日についてあてはまる番号に○をつけてください（1ヶ月の平均）
 1. 週3日以上 2. 週2日 3. 週1日 4. 週1日未満

- 問11 現在のあなたの帰宅時間についてあてはまる番号に○をつけてください（休日を除いた平均）
 1. 16～18時 2. 18～20時 3. 20～22時
 4. 22～0時 5. その他（ ）

問 12 あなたの育児休業制度の利用についておたずねします

- (1) あなたの育児休業制度の利用についてあてはまる番号に○をつけてください
1. 利用した ⇒(2)にお進みください 2. 利用しなかった ⇒(3)にお進みください
- (2) (1)で、「1. 利用した」と回答された方におたずねします
休業期間はどれくらいでしたか。右の()内にお書きください。()
- (3) (1)で、「2. 利用しなかった」と回答された方におたずねします
育児休業制度を利用しなかった理由についてあてはまる番号に○をつけてください
1. 利用したかったが制度がなかった 2. 制度があり、利用したかったが、利用できなかった
3. 制度がなく、利用しようと思わなかった 4. 制度はあったが、利用しようと思わなかった
5. 制度についてよく知らない

問 13 お子様の母親の職業についておたずねします

- (1) お子様のお母様の職業の有無についてあてはまる番号に○をつけてください
1. 職業についている ⇒(2)にお進みください 2. 職業についていない
- (2) (1)で「1. 職業についている」と回答された方におたずねします
お母様は、週何日、1日平均何時間働いておられるかをお書きください
週()日 1日平均()時間
-

Part 1 【問 14～23 は、お父様のみお答えください】⇒お父様以外の方は、Part 2(5 ページ)へ

問 14 子どもができたときわかったと思う時ですか。あてはまる番号に1つだけ○をつけて下さい

1. だいじんうれしい 2. まあまあうれしい
3. あまりうれしくない 4. ぜんぜんうれしくない
⇒「うれしい」以外に感じた気持ちがありましたら、以下に自由に自由にお書きください
()
- 問 15 妊婦検診に付き添いましたか。あてはまる番号に1つだけ○をつけて下さい
1. 診察室まで付き添って、胎児の映像を見たり、心音を聞いたりしたことがある
2. 病院へ一緒に行ったことがあるが、診察室には入ったことがない
3. 付き添ったことはない
4. その他()

問 16 父親学級や両親学級に参加しましたか。あてはまる番号に1つだけ○をつけて下さい

1. 参加したことがある 2. 参加したことはない 3. その他()

問 17 出産したのはどのような施設でしたか。あてはまる番号に1つだけ○をつけて下さい

1. 総合病院 2. 産婦人科医院 3. 助産院
4. 自宅 5. その他()

問 18 どのような出産の形態でしたか。あてはまる番号に1つだけ○をつけて下さい

1. 普通分娩 2. 吸引・鉗子(かんし)分娩
3. 帝王切開 4. 無痛分娩 5. その他()

問 19 出産への立ち会いについてあてはまる番号に1つだけ○をつけてください

1. 陣痛期のみ立ち会った 2. 出産のみ立ち会った 3. 陣痛期から出産まで立ち会った
4. 立ち会わなかった 5. その他()

問 20 出産への立ち会いの希望がありましたか。あてはまる番号に1つだけ○をつけて下さい

1. 希望していた 2. 希望していなかった 3. その他()

問 21 はじめて子どもと対面した時、どんな気持ちになりましたか。あてはまる番号に1つだけ○をつけて下さい
下さい

1. だいじんうれしい 2. まあまあうれしい
3. あまりうれしくない 4. ぜんぜんうれしくない
⇒「うれしい」以外に感じた気持ちがありましたら、以下に自由に自由にお書きください
()

問 22 はじめて子どもを抱いた時、どんな気持ちになりましたか。あてはまる番号に1つだけ○をつけて下さい
下さい

1. だいじんうれしい 2. まあまあうれしい
3. あまりうれしくない 4. ぜんぜんうれしくない
⇒「うれしい」以外に感じた気持ちがありましたら、以下に自由に自由にお書きください
()

問 23 出産後のことについておたずねします

- (1) 出産後、里帰りなどで子どもと離れている時期がありましたか。
あてはまる番号に○をつけて下さい
1. 離れている時期があった ⇒(2)にお進みください
2. 離れている時期はなかった 3. その他()
- (2) (1)で「1. 離れている時期があった」と回答された方におたずねします
子どもと離れていた期間と、その理由についてお書きください
離れていた期間()
離れていた理由()

Part2

【問 24 は、すべての方がお答えください】

問 24 以下の項目について、a 今の状況、b 気持ちのあてはまる番号に 1 つだけ○をつけ (f.その他)について ()内に記入)、c 具体的な状況についての設問がある場合は、()内に記入してください

- 1) 子どもと一緒に夕食をとる
- a 1. ほとんど毎日 2. 週に3、4日 3. 週に1、2回 4. ほとんどない 5. その他 ()
b 1. 自分からすすんでしている 2. すずんでは 3. できていないが 4. したいとは 5. その他 ()
ないがしている したいと思っている 思わない
- 2) 子どもと一緒にお風呂に入る
- a 1. ほとんど毎日 2. 週に3、4日 3. 週に1、2回 4. ほとんどない 5. その他 ()
b 1. 自分からすすんでしている 2. すずんでは 3. できていないが 4. したいとは 5. その他 ()
ないがしている したいと思っている 思わない
- 3) 子どもの遊び相手になって一緒に遊ぶ
- a 1. ほとんど毎日 2. 週に3、4日 3. 週に1、2回 4. ほとんどない 5. その他 ()
b 1. 自分からすすんでしている 2. すずんでは 3. できていないが 4. したいとは 5. その他 ()
ないがしている したいと思っている 思わない
- 4) 子どもをだっこしたり、スキンシップをする
- a 1. ほとんど毎日 2. 週に3、4日 3. 週に1、2回 4. ほとんどない 5. その他 ()
b 1. 自分からすすんでしている 2. すずんでは 3. できていないが 4. したいとは 5. その他 ()
ないがしている したいと思っている 思わない
- c どんな時にだっこしたり、スキンシップをしますか ()
- 5) 子どものオムツを換える(「子どもが赤ちゃんの時換えていた」も含む)
- a 1. ほとんど毎日 2. 週に3、4日 3. 週に1、2回 4. ほとんどない 5. その他 ()
b 1. 自分からすすんでしている 2. すずんでは 3. できていないが 4. したいとは 5. その他 ()
ないがしている したいと思っている 思わない
- 6) 子どもを寝かしつける
- a 1. ほとんど毎日 2. 週に3、4日 3. 週に1、2回 4. ほとんどない 5. その他 ()
b 1. 自分からすすんでしている 2. すずんでは 3. できていないが 4. したいとは 5. その他 ()
ないがしている したいと思っている 思わない
- 7) 子どもを言葉で叱る
- a 1. ほとんど毎日 2. 週に3、4日 3. 週に1、2回 4. ほとんどない 5. その他 ()
b 1. 自分からすすんでしている 2. すずんでは 3. できていないが 4. したいとは 5. その他 ()
ないがしている したいと思っている 思わない
- c どんなことをした時に言葉で叱りますか ()
- 8) 子どもを叩いて叱る
- a 1. ほとんど毎日 2. 週に3、4日 3. 週に1、2回 4. ほとんどない 5. その他 ()
b 1. 自分からすすんでしている 2. すずんでは 3. できていないが 4. したいとは 5. その他 ()
ないがしている したいと思っている 思わない
- c どんなことをした時に叩いて叱りますか ()
- 9) 家の仕事を分担して手伝う
- a 1. ほとんど毎日 2. 週に3、4日 3. 週に1、2回 4. ほとんどない 5. その他 ()
b 1. 自分からすすんでしている 2. すずんでは 3. できていないが 4. したいとは 5. その他 ()
ないがしている したいと思っている 思わない
- 10) 子育てについて、夫婦で話し合う
- a 1. ほとんど毎日 2. 週に3、4日 3. 週に1、2回 4. ほとんどない 5. その他 ()
b 1. 自分からすすんでしている 2. すずんでは 3. できていないが 4. したいとは 5. その他 ()
ないがしている したいと思っている 思わない
- 11) 子育てについて、知人と話をする
- a 1. ほとんど毎日 2. 週に3、4日 3. 週に1、2回 4. ほとんどない 5. その他 ()
b 1. 自分からすすんでしている 2. すずんでは 3. できていないが 4. したいとは 5. その他 ()
ないがしている したいと思っている 思わない

Part 3 【問 25 はすべての方がお答えください】

問 25 あなたの気持ちに最も近いと思われる番号に1つだけ○をつけてください

- 1) 毎日の子育てが楽しい
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

「1 非常にそう」または「2 まあまあそう」と回答された方におたずねします
 どのようなことが楽しいですか。ご自由にお書きください。

- 2) 子育ては苦痛だ
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

「1 非常にそう」または「2 まあまあそう」と回答された方におたずねします
 どのようなことが苦痛ですか。ご自由にお書きください。

- 3) 子育てについて悩みがある
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

「1 非常にそう」または「2 まあまあそう」と回答された方におたずねします
 どのようなことにお悩みですか。ご自由にお書きください。

- 4) 子育てが好きだ
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

- 5) 子育ては面白い
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

- 6) 「子育てをしている」と実感する
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

- 7) 子どもの成長している姿を
 みるのが嬉しい
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

- 8) 自分は子育てに向いていない
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

- 9) 子育てを通して、自分の世界や
 視野が広がった
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

- 10) 子育てのために、自分が犠牲に
 なるのは仕方がない
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

- 11) 子どもに愛情を感じている
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

- 12) もっと子どもと一緒にいる時間が
 欲しい
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

- 13) もっと夫婦のための時間が欲しい
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

- 14) 長時間子どもだけを相手にして
 過ごすのは苦痛である
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

- 15) 良い親であろうとして無理をして
 いる
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

- 16) 経済的な必要がなければ、子どもが
 小さい間、父親は母親は
 仕事をせずに家にいた方がいい
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

- 17) 仕事の事情が許せば、子どもが
 小さい間、父親は仕事を減らして
 在宅時間を長くした方がいい
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

- 18) 子育てを通して、自分も成長して
 いきたい
 1. 非常に そう
 2. まあまあ そう
 3. あまりそう ではない
 4. ぜんぜんそう ではない

Part 4

【問 26 は、お父様のみお答えください】⇒お父様以外の方は、最終ページへお進みください
 問 26 あなたの考えに近いと思われる番号に1つだけ○をつけてください。

- 1) 「理想的な父親」のイメージを
 自分なりに持っている
1. 非常に そう 2. まあまあ そう 3. あまりそう ではない 4. ぜんぜんそう ではない

「1 非常にそう」または「2 まあまあそう」と回答された方におたずねします
 それはどんな父親ですか。ご自由にお書きください。

- 2) 自分は理想的な父親だと思う
1. 非常に そう 2. まあまあ そう 3. あまりそう ではない 4. ぜんぜんそう ではない

- 3) 子育てする上で、父親と母親の
 役割に差はないと思う
1. 非常に そう 2. まあまあ そう 3. あまりそう ではない 4. ぜんぜんそう ではない

- 4) 子どもがある程度大きくなって
 からが父親の出番だ
1. 非常に そう 2. まあまあ そう 3. あまりそう ではない 4. ぜんぜんそう ではない

- 5) 子育てで「母親(妻)」には
 かなわないと思う
1. 非常に そう 2. まあまあ そう 3. あまりそう ではない 4. ぜんぜんそう ではない

- 6) 子育てにおいて父親は
 なくてはならない存在である
1. 非常に そう 2. まあまあ そう 3. あまりそう ではない 4. ぜんぜんそう ではない

- 7) ほかの父親がどんな子育てを
 しているのか気になる
1. 非常に そう 2. まあまあ そう 3. あまりそう ではない 4. ぜんぜんそう ではない

- 8) 子育てにおいて父親にしか
 できない(母親にはできない)
 ことがある
1. 非常に そう 2. まあまあ そう 3. あまりそう ではない 4. ぜんぜんそう ではない

「1 非常にそう」または「2 まあまあそう」と回答された方におたずねします
 父親にしかできないことは、どのようなことでしょうか。ご自由にお書きください。

- 9) 子育てにおいて母親にしか
 できない(父親にはできない)
 ことがある
1. 非常に そう 2. まあまあ そう 3. あまりそう ではない 4. ぜんぜんそう ではない

「1 非常にそう」または「2 まあまあそう」と回答された方におたずねします
 母親にしかできないことは、どのようなことでしょうか。ご自由にお書きください。

- 10) 母親(妻)におつばいが
 あるのがうらやましいと
 思ったことがある
1. 非常に そう 2. まあまあ そう 3. あまりそう ではない 4. ぜんぜんそう ではない

「1 非常にそう」または「2 まあまあそう」と回答された方におたずねします
 どのようなときにうらやましいと思いましたか。ご自由にお書きください。

Part 5【問 27～29 はお父様のみお答えください】⇒お父様以外の方は、最終ページへお進みください

問 27 お子様の誕生前後の時期を通じて、いつ頃から父親になったと感じたかあてはまる番号に1つだけ〇をつけてください。また、具体的な時期がわかれば()の中にお書きください

- 1. 第1子の妊娠中 () (具体的な時期)
- 2. 第1子の誕生時 () (具体的な時期)
- 3. 第1子の誕生後～1歳になるまで () (具体的な時期)
- 4. 第1子が1歳になってから () (具体的な時期)
- 5. その他 () (具体的な時期)
- 6. まだよくわからない

問 28 次の書きかけの文章を見て、あなたの頭に浮かんできたことを続けて書き、文章を完成してください

- 私にとって子どもは_____
- 子どもにとって私は_____
- 私にとって妻は_____
- 妻にとって私は_____
- 私にとって家族は_____
- 家族にとって私は_____
- 子育ては_____

問 29 乳幼児をもつ父親への育児支援についておたずねします

(1) 乳幼児をもつ父親のために、何らかの育児支援が必要だと思いますか

あなたの考えに最も近いものに1つだけ〇をつけてください。

- 1. 必要だと思う ⇒(2)にお進みください
- 2. 必要ないと思う
- 3. わからない

(2) (1)で「1.必要だと思う」と回答された方におたずねします

どのような育児支援が必要だと思いますか。ご自由にお書きください。

【すべての方へ】差し支えなければ、日頃子育てについて感じたり考えたりされていることを自由に記入ください。

個別インタビューへのご協力をお願い

本調査用紙による研究に加えて、子育てに関して個別インタビューに応じてくださる保護者の方を募集します。できるだけ皆さまの子育てに対する生の声をうかがっていきたくと考えています。

インタビューにご協力いただける方は、ご都合のよい連絡先を以下にご記入ください。後日こちらから連絡をさせていただくことがありますので、その際はご協力をお願い申し上げます。

氏名 : _____

電話番号 : _____

メールアドレス : _____ @ _____

お書きいただいた個人情報、インタビューについての連絡以外の目的に使用することはありません。

お忙しい中、ご協力いただきましてありがとうございました。

第3期子育て研究会メンバー一覧

- 代表 高石 恭子（甲南大学文学部教授／学生相談室専任相談員）*
- 穂苅 千恵（山王教育研究所相談員／
前甲南大学文学部人間科学科准教授）**
- 中里 英樹（甲南大学文学部社会学科教授）*
- 新道 賢一（甲南大学心理臨床カウンセリングルーム）* 担当7章
相談員
- 濱田 智崇（帝塚山学院大学）** 担当5章1
- 岡田 尚子（夙川学院中・高等学校）** 担当5章2
- 甲斐 暁子（三木メンタルクリニック）** 担当8章
- 川口 彰範（関西こども文化協会相談員）** 担当4章
- 藤原 雪絵（甲南大学人間科学研究所博士研究員）担当3章、6章
- 久留嶋祥吾（甲南大学人間科学研究所リサーチアシスタント）担当1章
- 岩本沙耶佳（甲南大学人間科学研究所リサーチアシスタント）担当1章
- 稲岡 直子（甲南大学大学院人文科学研究科人間科学専攻）担当2章
- 福島 充人（甲南大学大学院人文科学研究科人間科学専攻）担当2章

*は人間科学研究所兼任研究員
**は人間科学研究所客員研究員